
Future × Real

条理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Future x Real

【Nコード】

N0338R

【作者名】

条理

【あらすじ】

自他共に認める不運な少年 浅庭景太あさなほけいたは中学校二年の夏休みに、何と女の子を拾ってしまった……！ そこから幼馴染や銀髪なイトコが絡んできて更なる受難発生！？ はたしてどうなる、主人公！ なノリで送るハイテンション学園能力バトルコメディ、ここに開幕！！

すべての始まり くプロローグ

それは、突然のことだった。

目の前にいる怪しい人物。

その周りにいる生物のようなもの。

(この暑さのせいで、幻覚をみているのかもしれない。)

俺はそう思い、目をこすってみる。

でも、効果は無かった。

(やっぱり、俺の不運のせいだ……。)

そう、これは不運としか言いようが無かった。

だって、さっきまでいたスーパーマーケットの時計も、

いまいる公園の時計も、俺の携帯電話の時計も、

全て止まっているのだ。

俺の名前は、
浅庭^{あさば} 景太^{けいた}。

多分、ここ掛井川市の中では一番不運な人間である。

* * * * *

ことの始まりは俺が朝寝坊をしてしまったことからである。

《ピュピュピュピュピュ……》

ガシャン！

「……うるさいなあ」

そう言いつつ目覚まし時計を確認してみると、俺の目は一気に覚めた。

「ねっ寝坊したー！ー！」

急いで着替え自分の部屋から階段を一気に駆け下り、リビングのドアをバタンと開けると

そこは既に家主である彼が旅立った後だった。

テーブルには書置きが残されていた。

“親愛なる我が甥っ子景太へ

叔父さんは、今からアメリカへ言ってくる！

。お前を起こそうとしたが、いい顔で寝ていたので止めておいた（笑）

なあにお前の誕生日には帰ってくる予定なので心配するな。

俺の留守中に、女の子なんて連れ込むなよ！（ニヤリ）

じゃあ、家のことは夜露死苦！

政二郎より”

「……………何で起こしてくれないかなあ」

俺はその書置きを見て思わずため息をついた。

その書置きを手にとって見ていると、裏に何か書いてあることに気が付いた。

“ 追伸 冷蔵庫の中に朝メシを作っておいた。

あと冷蔵庫の中がすっからかんなので、置いてある食費で何か食材を買っておいた方が
良いぞ

じゃあ健闘を祈る！”

（なんでこんな暑い中スーパーまで行かないといけないんだ…）

西暦2027年7月20日。

俺の波乱の夏休みの幕開けであった……。

第一話 幼馴染と嘘

西暦2027年7月19日、午前10時45分。学校の終業式にて。

(どここの学校でも校長先生の話は長いのだろうか…。)

そんなわりとどうでも良いことを考えながら、僕はあくびをかみ殺していた。

「
と言っわけであって、君達は伝統ある掛井川学園の生徒としての自覚と責任を持っていなければならないのです。それが例え夏休み中であっても変わることはありません。くれぐれも八メをはずしすぎないように！以上で私の話は終わります」

「以上で、終業式を終わります。各クラスの担任の先生の指示に従って行動してください」

まったく長い話もタイガイにしてほしいもんだねえ、と思っていたら。

「かぐや、そんな事言ったら校長がかわいそうだよ」

僕の親友がそんな事を言いながら、こちらに近づいて来た。

「あつ、けいた！どうしたのさ。僕はそんな事思っていたけど口には出していないよ！」

「……いや、さっきからぶつぶつ口に出してたけど、自分で気づかなかったの？」

「そういえば、ワタセン何て言ってた？ 体育館こくでホームルームするの？」

「やけに強引に話変えたな……。体育館こくじゃなくって教室でホームルームするって」

「え、もー話聞くのヤダあ」

「愚図るなつて。先生あまり話しないつてさ」

靴を履き替え、昇降口へと話しながら向かう。

僕の名前は、月宮つきみや かくや。

少し不運な親友おさななじみがいる中学校二年生である。

* * * * *
* * * * *

同日、午前11時12分。教室にて。

教壇にて鼻息荒く僕らの担任の渡辺先生（通称ワタセン）は次のように語った。

「先ほど校長先生がおっしゃっていたように、夏休み中だからと言ってハメをはずしすぎないように！9月に元気に皆が登校すること

とを楽しみにしています。以上で、先生の話は終わります。委員長、号令かけて！」

「起立、礼！」

「」「」「ありがとうございます！」「」「」

「さあして、帰ろう！今すぐ帰ろう！すぐ帰ろう！けいた今日一緒に帰ろう！」

「そんなに“帰ろう！”を連呼しなくてもいいんじゃないか？」

そう意気込んでいたのに。 あの せんせい野郎は。

「月宮あー！少し学校に残れ。大事な話がある！ああ、浅庭は帰っていいぞ」

そう言うとワタセンは僕の目の前に立ち塞がった。身長187「cm」、元ラグビー部部長のこいつを抜かすなんてアイールド21にでもならないと無理だろう。僕は潔く諦めた。

「……先生、僕に何か恨みでもあるんですか？今から帰る気満々だったのにいゝ！」

僕はそうワタセンに文句を言った。すると僕の親友はさり気なくこう言った。

「先生、かぐやまた何かしたんですか？何なら俺も一緒に話聞きますけど」

するとワタセンは急にけいたに対して態度を変えやがった。こういうときはクラス委員長って良いなあと思ったりする。

「月宮と二人で話したいことなんだが、まあしょうがない。浅庭も付いて来い」

そう言いつつワタセンは、魔の生徒指導室へとドカドカと足音を立てながら進んでゆく。それに僕らも付いて行く。

「ありがとう、けいたあ。僕一人だとワタセンにこっぴどく怒られるところだったよ」

「それより、かぐや。お前何しでかしたんだ？この前の”初代校長像に落書き事件”よりはひどくないよな？」

どうやらけいたは、僕がまたイタズラをしたのだと思っているらしい。だが今回僕は、何もイタズラをしていないので心当たりがなかった。

「別に何もしていないよあ。まあプランは練ってあったけど」

「……お前って奴は。全く懲りていないんだなあ」

そう言うと彼はため息をついた。僕、何か悪いこと言ったのかな？生徒指導室に入ると、ワタセンは僕に対して超意外なことを言った。僕はてっきり怒られるものだと思っていたので拍子抜けしてしまった。

「月宮、担任として頼みがあるんだ…。お前明日からイギリスに行くんだよな。悪いんだけど何も聞かずにこのお金で何かお土産を買ってきてくれないか？なるべく女性受けしそうな洒落なものがいんだ」

「先生、そんなくつだらなことで僕を呼んだんですか？」

「く、くだらないとは何だ！俺は恥をしのんでお前に頼んでいるというのに！」

顔を真っ赤にしながら諭吉様を三枚手に握りながら頼んでくるワタセンを見ていると、何だか僕は居た堪れない気持ちになっていた。なので僕は。

「分かりました。何か買ってくれば良いんですね。僕の独断で決めてきますけど良いですよね？」

「ほ、本当か！！ありがとう月宮！恩に着る！」

ふっ、また良いことをしてしまった。僕って本当に良い奴だなあ。

「かぐや、お前って本当に性格悪いな……」

親友の呟きが耳に痛いぜ

* * * * *
* * * * *

同日、午後11時30分。帰り道にて。

「しかし、かぐやは明日からいないのかあ。寂しくなるな」

「大丈夫！また帰ってくるからさあ」

けいたは本当に寂しそうな顔をした。僕は大事な大事な親友に嘘をついていた。

僕は本当はイギリスになんか行かないんだ。

例えオトーさんに会えたとしても、君を置いて海外になんか絶対行かないからね、けいた

後にこの選択は僕とけいたを非日常へと誘いこむことになるとは、想像もしていなかったのである。

第二話 非現実な日常 【前編】

西暦2100年7月20日、午前8時06分。東京都某区の超高層ビル近くにて。

皆が笑顔で幸せだった世界はもう何処にもない。

私が見ている光景がその全てを物語っていた。

建物のガラスのほとんどが割られ、車と呼ばれていたモノが破壊されそこに横たわっていた。

何よりこの街には、人一人歩いていない。

その代わりにあの生物のようなものが我が物顔で街を闊歩している。

（全ての原因は私と、“アノ人”にある……）

私はこの世界を元に戻さなければいけない。皆が笑顔で幸せだった世界に。

それが時の守護者である私の責任であり義務なのだから。

（少しだけ待っててね。必ず皆と世界を救うから）

私は大好きだったこの街に別れを告げ、旅立つ。

一緒に世界を救ってくれる人がいる時代に。^{せかい}

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月20日、午前8時30分。浅庭家食卓にて。

叔父さんの作ってくれた味噌汁は少ししょっぱかった。

(叔父さんの見送りしたかったなあ)

そんなことを思いながら、朝ご飯をゆっくりと食べる。

現在の時刻は午前8時30分。今頃叔父さんは新幹線の中だろう。

「何でこんな時に寝坊なんてするかなあ……」

今回は絶対見送りだけはしたかったのに。父さんのときみたいなことにはしたくないのに。

(……いや叔父さんなら大丈夫だ。絶対あの時みたいにはならない)

電話でもしてみようか。いや多分叔父さんのことだから携帯の電源は切られてる。

ならメールをしておこう。何時でも見られるように。

“叔父さんへ

アメリカ出張頑張ってください。でもあまり頑張り過ぎないでください

い。

お土産楽しみにしています。絶対に帰って来てください。

景太より”

(これでよし！)

「かぐやにも連絡しておこうかな……。まあ大丈夫か、あいつなら食べ終わった食器を流しに持っていき洗う。少しだけ心が軽くなっ
た気がした。

よし掃除でもしようと思い、物置に掃除機を取りに行った。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。隣家、月宮家の台所にて。

お世辞にも上手いとは言えない歌を歌う一人の少年がいた。

「きょうの〜あさごはんは〜スーパー　ツプ醤油味二個〜」

そう歌いながら二個のカップ麺にお湯を注いでいく。

「そう言えばオカーさんもうイギリスに着いたかなあ？」

そんな独り言を言いつつ、僕は昨日のことを思い出していた。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月19日、午後4時23分。隣家、月宮家の居間にて。

『かぐや、本当に一人で留守番できるの？』

よそいきのワンピースに身を包んだオカーさんが僕に聞いてきた。

僕は自信満々に笑顔でこう言った。

『大丈夫！僕もう中学二年生だもん！夏休みの間の留守番くらいわけないさあ』

オカーさんは本当に心配そうな顔でため息をつきつつ言った。

『景太君がその言葉を言うならお母さん安心なんだけどねえ……』

『何さあ、オカーさん息子の言うことが信用できないの？』

（オカーさんは何でそんなに僕を信用できないんだ！全く嫌になっちゃうよ）

そう思っていたら、オカーさんは。

『信用するも何もあんたの普段の行動から何を信用すればいいの。いつもいつもイタズラばかりして』

『オカーさん、何で僕の考えていることが分かったのさ!?!?』

『だって、あんたいつもぶつぶつ独り言言ってるじゃない』

『……とにかく、オカーさんはゆっくりオトーさんの面倒を見てればいいの!』

『強引に話変えたわね……。まあいいわ。一応困ったことがあれば、景太君に頼みなさい。政二郎さんにもそうお願いしておいたから』

そう言つてオカーさんは、玄関で靴を履いて家を出た。

『いつてらっしやーい!』

僕はそう言つてオカーさんを見送つたのである。

* * * * *
* * * * *

そんなことを思い出していると、いつの間にかラーメンは出来上がっていた。

「おおー、美味しそうだぜい」

箸を手に持ちちゃぶ台へとラーメンを移動させる。

湯気を立てているラーメンに箸をいれ、スープと麺が絡まるようにかき混ぜていく。

「さあーて、どうやってけいたを驚かせようかなあ〜」

ラーメンに息を吹きかけながら、僕はそんなことを口にしていた。

驚かせた後の親友の顔が楽しみだった。

第三話 非現実な日常 【中編】

もうどれだけ歩いただろう。足が棒になるとは正にこのことだと思
う。

街を離れ私はひたすら時の狭間を歩いていた。

この場所は時間と時間を繋ぐ抜け道のようなもので、本来は人間が
立ち入っていい場所ではない。

しかしあの組織と“アノ人”に見つかること無く時間を渡するにはこ
の方法を使うしかなかった。

あの世界を救うには、世界が変わる前兆が一番最初に現れた時代に
行くことが第一の条件だった。

「とにかく、早く行かないと、大変なことになる……」

私の助けを待っていてくれる人達がいる。しつかりしなきゃ！

疲れた自分に活を入れながら、一歩一歩進んでいく。

西暦2027年7月20日。私が目指すゴール地点はそこに迫って
いた。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月20日、午前9時30分。浅庭家にて。

「こんなものかなあー、思わず叔父さんの研究部屋まで掃除しちゃったけど」

俺は、一人掃除に精を出していた。普段は使う部屋以外は掃除しないのだが、今日はいつもより掃除をしたい気分だったので使わない部屋まで掃除してしまった。

あと掃除していないのは　あの部屋だけだ。

「……さて、やるか」

俺は弱気になる自分に活を入れ、玄関脇の襖に手をかけ引いた。

そこは家の仏間である。ここの掃除だけは叔父さんがしてくれるのだが、今日から叔父さんはいないので自分でしなくてはならない。

仏間には家のご先祖様の写真が飾ってある。そしてつらい現実もそこにはある。

「父さん……」

手を合わせて、父さんに言うことは一つだけである。

(父さん、ごめんなさい。父さんを死に追いやったのは、俺なのに。生きてて「ごめんなさい」)

「さて、掃除掃除っ」と

(父さんの為に涙を流せなくてごめんなさい)

俺はつらい現実から逃げながら、仏間の掃除をする。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。隣家、月宮家居間にて。

「ふっふっふ、で、出来たあー！ー！」

僕はあるモノを完成させていた。

「やっと出来たぞ！題して“けいたドッキリ大作戦”！！」

作戦の概要はこうだ！

まず、庭から浅庭家に侵入する。

比較的空いているリビングの窓からリビングに侵入する。

(このときにリビングにけいたがいなくて入念にチェックする！)

その後政さんの研究部屋に隠れる。

(ここに隠れるのは、けいたは普段からこの部屋に入ったりしないから)

お昼時になったら、携帯でけいたに電話する。

上手い具合にけいたを研究部屋に誘導する。

ドアが開いた瞬間に驚かせる。

そのときに持っていたインスタントカメラでけいたの顔を激写！

ドッキリ大成功

「こんなもんでござよ（ニヤリ）」

僕は自分で作ったイタズラに胸をワクワクさせていた。

本当にドッキリさせられるのは僕であることをまだ知らずに……。

第四話 非現実な日常 【後編】

西暦2027年7月20日、午前11時20分。浅庭家リビングおよび二階にて。

「マイバツク持った。買い物メモ持った。財布持った。あつ、携帯忘れた！」

掃除と洗濯を終わらせた俺は今から買い物に行こうとしていた。

携帯をジーンズのポケットの中に入れる。と思ったら。

「あつ、“アレ”も忘れてた。うっかりしてた」

二階への階段を上り、自分の部屋のドアを開ける。

勉強机の上に置いてあった“アレ”を手取る。

それは、日の光を浴びて美しく輝く青い宝石だった。

大きさは3「cm」ぐらいで、きれいに半円状に磨いて形作ってる。

下に銀と思われる台座をはめ込んであった。

「……ちゃんと持つかないとな」

その宝石をベルトのチェーン部分に引っ掛けて部屋を出る。

玄関を出ると、外は買い物に出るには暑すぎるほどだった。太陽が
さんと地面に照りつけて暑い。

「よしっ行くか！」

自分に気合を入れ、自転車を大きく漕ぎ出した。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。隣家、月宮家玄関にて。

玄関の物陰に隠れていた僕は、けいたが自転車で何処かに行くところを目撃した！

「どうするかなあ、作戦が狂い始めちゃったよお」

僕の作戦はけいたが家にいてこそ成り立つものなのに、その肝心の
けいたが家にいないんじゃないか。あ意味が無いじゃないか。まったくけい
たのバカバカ！

「でも、あの様子なら買い物かなあ。マイバック持ってたし」

自転車のカゴの中にマイバックを入れていたので、間違いは無いだ
ろう。

「作戦変更して、もっと驚かせてやるうー！」

僕の顔は知らないうちに、ニヤニヤしていた。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月20日、午前11時45分。スーパーの帰り道にて。

俺は汗がだくだくで自転車を漕ぎながら家に帰っていた。

(家に帰ったら、シャワー浴びたい。クーラーつけて涼しく過ごすんだ……)

そんな事を思いながら自転車を漕いでると、ある異変に気が付いた。

雲の流れが止まっている。蝉が鳴いていない。風が止まっている。

携帯を開いて、液晶画面をしてみる。

「時計が進んでいない？」

画面の時計は11時45分から動いていないのだ。

(……おかしいぞ。俺が行ってきたスーパーから、この公園近くの道まで10分ぐらいかかるはずだ)

スーパーを出たのが45分のときだから、本当は55分になってないとおかしいのに……!!

「どうなってるんだ!!」

とにかく早く家に帰って見ないと、分からない。

俺は自転車を漕ごうとして、目の前に広がる光景に止まらざるを得なかった。

黒い生き物のようなものが、俺の行く先を塞いでいたのだ。

そして段々と俺に迫ってきている……!!

(俺この化け物に襲われて死ぬのかな……)

そんな事を思ったとき。

「あきらめないで!!ここから逃げて!!」

俺の目の前に、黒髪のきれいな女の子が現れたんだ。

「ここは私が食い止めるから、あなたは逃げて!!」

それが俺とヒカリの出会いだったんだ。

第五話 ソラノヒカリ

西暦2027年7月20日、午前11時45分。掛井川市杉谷第一公園にて。

私が来た時には、もう既に異変が起こっていた後だった。

あの黒い化け物“タイムロス”が時間を止めて人々に襲いかからんとしていた。

砂場で遊んでいた子供たちにタイムロスが襲い掛かるうとしていた。

(守らなきゃ、あの子達が！)

「やめなさい！相手なら私がする！！」

私は首にかけていた赤い宝石に念を込める。するとその宝石を組み込んだ拳銃が現れる。

狙いを定めて引き金を引く。

私が放った弾は見事に命中した。そして化け物はそこに最初からいなかったかのように消滅する。

その調子でどんどん化け物を殲滅していく。

しかし、化け物達にも異変が起きた。

なんと、この公園を出て街に侵攻しようとしていた……！！

(まずい！街に出られたら私だけでは止められない！)

公園の外に急いで出ると、一人の男の子が化け物に襲われそうになっていた。

でも、彼は逃げようとはしていなかった。

(逃げることを諦めている……。何とかしなきゃ！)

気が付くと、声を張り上げて叫んでいた。

「あきらめないで！ここから逃げて！！」

私はいつの間にか走っていた。頭の中はある思いで一杯だった。

(彼を守らないと……。！！)

初めて会ったはずなのに、私は昔から彼のことを知っているような気がした。

彼の目の前に立ち、こう言った。

「ここは私が食い止めるから、あなたは逃げて！！」

それが、私と景太君との出会いだった。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。杉谷第一公園前にて。

俺の目の前には黒い化け物がいて、さっきまで俺は生きることすら諦めていたのに。

彼女に“ここから逃げて”なんて言われていると、父さんの言っていた言葉を急に思い出した。

『いいか、景太。困ったときには人は動揺しがちだ。まずは冷静になれ!』

『男には戦わなければいけないときがあるんだ。』

『いくら今の時代女性が強くたって守ってもらってばかりじゃ男が廃るぞ!』

『いざつてときには男は大切な人を守れるくらいにならないといけないんだ!』

分かったよ、父さん。父さんのお陰で頭が冴えてきた。

「君は誰?あの化け物は一体何なの?」

俺は彼女に質問をした。彼女は。

「あの化け物は、人を喰らい自分の力にするの。食べられた人間は時間からその存在を抹消される」

「戦う方法は？」

「君は“アレ”と戦う気！？無茶だよ、生身の人間じゃ勝ちっこない！！！」

「でも君は見たところあの化け物と戦っているみたいだし……俺も、君の力になりたいんだ」

彼女はため息をつき、俺の方に向き直った。

「君は契約者じゃない、ただの一般人でしかないの！ここは私に任せて逃げて！」

俺は覚悟を決めた。

「だったら、その契約者になれば良い！生憎俺は君を捨て置いて逃げるつもりはさらさら無い！！！」

そう言った瞬間に異変が起きた。

俺のベルトにぶら下がっている宝石が突然光りだしたのだ。

俺はそれを手に取り、軽く振った。

すると、その宝石の周りに蛍のような光が集まりだしてその光が大きな鎌へと変化した……！！

彼女は、驚いていた。

「つまさか、君も時の守護者なの！？」

俺は。

「良く分からないけど、これで戦える!!」

鎌を振り回し、あの化け物達に軽く触れた瞬間、その化け物達がまるで泡のように消えていった。

「……嘘、まさか君も時の守護者だったなんて」

そう言うと彼女は地面に倒れてしまった。

「ちょっと、君大丈夫!? ねえしっかりして!!」

いつの間にか鎌は消え、時間も動き出していた。

とりあえず今は、倒れた彼女と買い物袋と自転車を何とかすることが先決だった。

第六話 天の助け

西暦2027年7月20日、正午。家までの帰り道にて。

俺は現在この太陽が照りつける気温36℃の炎天下の中、つい先ほど出会ったばかりの女の子（かなりの美少女）を背中に背負い、汗を流しながら家までの道のりを歩いてた……。

いつもは洗濯物を乾かしてくれる太陽も今はばかりは憎らしい……。

そして俺の前方を自転車で軽快に走っている俺の親友月宮かぐやも、今だけは殴り飛ばしたい気持ちで一杯だった。そして、その親友はと言つと。

「けいたー、早く〜 置いてっっちゃうぞー」

俺はまた父さんの言葉が思い出した。

『いいか、景太。いくら相手のことが頭にきたって、無闇に怒るなよ』

今日の父さんは、少しだけ俺に対して冷たい気がする。やっぱり俺のこと嫌いなんだな……。

「だったら、かぐやが代わってくれよー！」

俺がそう文句を言つと、かぐやは顔に満面の笑みを浮かべてこう言

った。

「だってさー、けいた。君が今その子をおんぶしてるのはさあ、僕にジャンケンで20連敗したからじゃないの？良いじゃん、かわいい女の子をおんぶするってシチュエーションは男なら一度は経験してみたいことランキング堂々の三位だよ（掛井川学園新聞調べ）」

……その信憑性の低いランキングはともかく俺が今この子をおんぶして歩いているのは、やはり自分の運の無さが原因なのだ。という事は。

「やっぱり俺のせいなのかー。はあ、不運だ……」

するとかぐやは落ち込む俺を見かねて、慰めてきた。

「まあまあ、けいた。そんな落ち込まないで。確かに君はジャンケンに負けてしまったけれども、今回は僕がたまたま家にいたから自転車と買い物袋とその子を同時に運ぶことが出来ているんじゃない。それこそ不幸中の幸い、天の助けって思えば良いんだよ」

こう言っている間もかぐやは自転車を運転していて、しかも後ろの俺の様子を見ながら自転車を漕ぎ続けている。

それなのに、自転車は真っ直ぐに走り続けているのだ。色々な意味でこいつはすごいよなあと思ってしまう……。

「お前の言うことも一理あるけどさあー、やっぱり俺的には納得出来ないんだよ」

「文句言ったら幸せが逃げてっちゃうよ、けいた。何時でもどん

なときでも笑顔が大事だよ」

(そんなこと言ったって、このクソ暑い中笑顔になんかなれんわ!)
そもそもこんな事になってしまったのは、つい10分ほど前にさかのぼる。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月20日、午前11時50分。杉谷第一公園にて。

俺は気を失ってしまった彼女を公園のベンチに寝かせて、これからどうするかを考えていた。

(彼女をこのままにして置けないし、一応俺の家に運び込む必要がある。でも、買い物袋と自転車を彼女と一緒に運ぶことは物理的に不可能だ。こんな時にかぐやがいてくれれば良いんだけど……)

と思っていたら丁度良いときに一本の電話が入った。

「はいもしもし浅庭ですが」

『HELLO、けいた! 元気にしてるか?』

「かぐやか。どうした? もうイギリスに着いたのか?」

『うんそのことなんだけどさあ。実は僕けいたに言わなければいけ

ない事があるんだZ E 』

「……もしかして実はイギリスには行ってないんだ、とか？」

『Oh! 良く分かったね、けいた 驚いた?』

「それよりもっと驚くべきことがあったから、別に驚かないよ……」

『そつそんな! 僕より驚くべきことって一体何さ!?!』

「それは後で説明するから。とにかく、お前今何処にいる? 手伝って欲しいことがあるんだけど、予定とかは大丈夫か?」

『……まあ今僕は家にいるし、予定とかも無いけどさ。少しくらい驚いてくれたっていいじゃないか……』

「そのことはごめん。とにかく手伝ってよ、人手が足りないんだ。」

『……分かった。今何処にいるの?』

「杉谷第一公園。荷物運びだけど手伝ってくれる?」

『分かった。今すぐそこに行くよ。でもどうしたの、けいた? 買い物でもしすぎちゃた?』

「……それはここに来れば分かる」

『じゃあ待っててね。すぐ行くから』

その後すぐに電話を切った。かぐやという助っ人を得たが、あいつ

がこの状況を見たとき
何て言うかが心配だった。

* * * * *
* * * * *

同日、午前11時53分。杉谷第一公園にて。

僕はけいたから荷物運びを頼まれたので文字通り急いで杉谷第一公園まで走ってきたのだが、自分の見た光景を信じる事が出来なかった……！！

な、な、な、何とけいたが公園のベンチに寝かせている美少女の額に手を当てているではないか！！

そして僕に気が付くと一言。

「案外早かったな、かぐや。そんなに急いでこなくても良かったのに」

僕は、僕は、気が付くと叫んでいた！！

「リア充は、爆発しろお！！」

その声は公園中に響き渡った。しかし残念なことに現在その公園には僕とけいたとその美少女しかいなかった。

いきなり大きな声で叫ばれたので、肝心のけいたは耳の中がおかしくなっているようだった。それが収まった後、この目の前にいるリア充はこんな言い訳をしてきた。

「か、かぐや。お前の思っていることと現実は大大きく異なっているぞ……」

「黙れリア充！お前は僕の知っているけいたではない！！」

「俺はお前のよく知っている浅庭景太で、俺はそのリア充（？）ってやつじゃない！」

「……じゃあその子は一体誰！？私だけを愛してくれるって言ったのは一体誰よ！！」

「落ち着けかぐや！！女顔のお前がそんな迫真の演技をしてみると、シヤレに見えないぞ！！」

「じゃあ私だけを愛してくれるってもう一回約束してくれる？」

「……お前を愛することは出来ないけど、一生親友でいるって約束は出来るぞ」

「……けいた。そこは僕の肩を抱いて”一生君の事を愛するから許してくれ！”って言うてから、ゆっくりと目を閉じて僕の顎に手をかけてキスに持っていくはずじゃない！！」

「……お前は俺とそんなことがしたいのか？はっきり言って俺はお前のこと男としか」

見てないからな」

「まあ、僕だつてけいたとキスなんて真っ平御免だけどね。で本題に入るけど、その子は一体誰？」

そう言つて僕は謎の美少女を指差した。するとけいたは困つた顔でこう言つた。

「実は俺もまだこの子とそんなに話をしていないから、よく分からないんだ……」

僕はとつても嫌な予感がしたので、けいたに質問をした。

「けいた、もしかして荷物運びつていうのはこの子のこと？」

「と自転車と買い物袋だ」

「そして、その心は？」

「一人が自転車のカゴに買い物袋を乗せて運転して俺の家まで運ぶ。そしてもう一人が

その子を背中に背負い、この暑い中俺の家まで運ぶ」

予感的の中した。けいたは、名前も知らないこの美少女を家に運ぶと言つたのだ。

そう分かつたら、僕のすべきことは唯一つ。いかにして自転車と買い物袋を運ぶ係に

自分なるかだ。そしてその方法を決めるのはコレしかない！！

「けいた、ジャンケンをしよう！勝った方は自転車と買い物袋を運ぶ。負けたら潔く

その子をおんぶしてけいたの家まで運ぶ。これでどうだ！！」

「……うん、そうした方が良さそうだな」

ふっふっふ、この馬鹿め！！自ら不利な状況に立たされているとも知らずに……！

この勝負、この月宮かぐや様がもらったあ！！

「最初はグー！ジャンケンポイ！」

* * * * *
* * * * *

そして、現在に至る。

「けいたー、あと少しだよー。頑張れー」

まあかぐやの応援に励まされ、やっと自分の家が見えてきたのでこの件は良しとしよう。

念願のクーラーはあと少しと迫っていた。

第六話 天の助け（後書き）

この幼馴染コンビを書いていると、夫婦漫才にしか見えないですね
（笑）

第七話 君ってお人好し

西暦2027年7月20日、午後12時08分。浅庭家リビング及びキッチンにて。

けいたの家のクーラーはスイッチを入れた瞬間から、もう冷風が流れ始めていた。

「やっぱクーラー最高!!」

そう言いながら右手に団扇を持ち、左手にリモコンを持ち大画面LEDテレビの電源を入れるともう笑っていいも!が始まっていた。今日のテレフォンショッキングは、人気女優の佐々木ユリナちゃんだ。

「はぁー、最近この子調子乗ってるよねー。自分がちょっと可愛くって演技が上手いからってさー。どうせ、数年後には地味な二時間ドラマのチヨイ役しか仕事がこのってないっつーの(笑)。ねえ、そう思わない?けいたー」

呼んでみたが、けいたは返事をしなかった。不信に思った僕はキッチンを覗いてみた。
すると……。

「さあ、どんどん研がれていくが良い!!研がれば研がれるほど貴様はどんどん強くなり、どんな野菜でも切れるようになるのだ! !さあさあ貴様の強さはそんなものではないだろう、西瓜が切れるまで研いでくれるわ!!」

何やら危ない独り言を呟きながら、包丁を丹念にダイヤモンドシャ
ープナーで研いでいる親友の姿を発見してしまった……。思わず携
帯でパチリ

ピロリ〜ンという間抜けな音がキッチンに響き渡る。

「……………聞いた。何やってんの？」

聞いたはこちらに気が付くと、急に顔を赤らめて僕に聞いてきた。

「聞いた？見ちゃった？」

「ええ。そりゃあもうバツチリと！」

僕は正直にそう答えると、聞いたは手に持っていた包丁を僕の方に
向けてきた！！

「あ、アレを見られてしまったならしょうがない……………！！ここで消
えてくれ、かぐや！！」

こんなところで死んでたまるか！！僕はまだやっていないギャルゲ
ーがあるんだ！！

そう思った僕は、この目の前にいる刃物を持った痛い子を何とか説
得しようと試みた。

「待った待った、ストップ！！落ち着けけいた！僕はさっき見たこ
とを誰にも言ったりしない！そんなに消したいほど僕のことを信用
できないの！？」

すると聞いたはあっさりと言。

「……あんまり信用できない。だって、お前さっきの映像携帯カメラで撮ってただろ!!」

ハッ！ついこの右手が携帯カメラを操作してさっきの映像を撮ってしまったっていたなんて!! 僕ったら、恐ろしい子!!だが、こんなことで挫けたりなんかしない!

「い、嫌だな、けいた。確かに僕は携帯に写真は撮ったけれど、でも音声までは保存できないじゃないか。全く君ってやつは、早とちりなんだから」

そう僕が言うと、けいたも頭が冷静になってきたのか包丁をまな板の上に置いた。

た、助かった……。危うく包丁の錆になるところだった。

「……そうだよな。写真だけだもんな。音声までは大丈夫だよな。ごめん、かぐや。俺、お前のこと誤解してたよ……。親友なのに疑ってごめん」

そう言って、けいたは僕に笑いかけた。その顔を見て僕も笑った。そして、あることを考えた。

(こんなにイケメンな親友がいるんだから、正面写真でも撮ってジャーズ事務所にでも送ってみようかな。あわよくば、僕の大好きな声優の築木 舞さんに会えるかも……)

そんな僕を見て、けいたは眉間にしわを寄せてこう言った。

「お前何か良からぬことを考えてないか？」

全く、けいたつたら変なところで鋭いんだから

* * * * *
* * * * *

同日、午後12時13分。浅庭家キッチン及びリビングにて。

俺はつい先ほどかぐやに恥ずかしいものを見られてしまい、一瞬あいつを消してしまおうかとも考えたが写真しか撮っていないと言っていたので許すことにした。そして現在あいつの為に中華鍋を振っている。

「けいたー、今日のお昼御飯なあにー？」

リビングの食卓では、もう既にあいつが箸やらお皿やらを並べて待っていた。

「もうすぐ出来るから待ってー！よつとー！」

中華鍋に残りの食材と調味料を入れ、さらにかき混ぜていき、一通り食材に火が通れば完成！！完成したそれをどんぶりによそっていく。

「はい出来上がり！！沢山食べていいぞ」

「おおー！炒飯ではないか！！スープまでついて。こりゃあ完璧だね」

そう言っつて、かぐやは用意していたスプーンで美味しそうに食べ始めた。

やっぱり喜んでくれる人がいると、料理って作り甲斐がある。

すると、かぐやが俺の顔を見て一言。

「けいた、今日の炒飯は85点つてところかな」

意外と高評価だったので、俺はびっくりした。

「そんなに評価高くていいのか!？」

俺がそう言っつと、かぐやは。

「やっぱり、君ってお人好しだね」

そう言っつて、俺の顔を見て盛大に笑った。

第七話 君ってお人好し（後書き）

幼馴染編はこれにてひとまず終了です。次回からヒロインと主人公の話になります（笑）

皆さんがニヤニヤ出来るような作品に出来るように頑張ります！

第八話 彼の横顔

西暦2100年7月21日、午後1時20分。東京都某区の超高層ビルおよび植物園にて。

第二東京タワーよりも高くそびえ立つそのビルは、外装は仕上がっているが内装はまだ出来ておらず、打ちっぱなしのコンクリートが剥き出しのままになっていた。

そしてそのビルの中でも、沢山のスーパーコンピューターと大量の液晶パネルが所狭しに並べてある部屋があった。その部屋の中で現在、数人の研究者と一人の青年が見つめ合っていた。

年齢的には研究者達の方がその青年よりも一回りも大きいのだが、何故か彼らはその青年に見つめられて萎縮していた。青年は彼らを一人ずつ見回した後、こう切り出した。

「監視システムの方は、どうなっている？」

すると一番右にいた研究者が、声を上ずらせながら言った。

「げ、現在復旧のめどは立っていません！」

そして、青年は右から二番目の研究者を睨みながら言った。

「では、バックアップの方はどうなっているんだ？」

質問された右から二番目の研究者は顔を青くさせながら言った。

「そ、それが、バックアップは外部の何者かのハッキング攻撃によつて、データを書き換えられてしまい意味をなさなくなつてしまいました……」

それを聞いた青年は先ほどよりも低い声で言った。

「……つまり、お前達の無能さによつて時の守護者の小娘を逃がしてしまったと、そういう事か？」

その声を聞いた瞬間、研究者達は全身に鳥肌が立つのを感じた。青年は続けざまに言った。

「無能なお前達に二つの選択肢をやるう。一つは今すぐ私の目の前で無様に土下座をして、許しを請うこと。もう一つは今すぐここで私の右腕達に無様に殺されること。さて、どちらを選ぶ？」

その言葉を聞いた瞬間に、彼らは本能で地面に頭をこすりつけ土下座をしていた。

「本当に、本当に申し訳ありませんでした、時暁様トキアカ！我々にもう暫く時間をくださいませんか！必ずや前システムを超えるようなものをあなた様の為にお作り致します。どうか、無能な我々をお許しください！」

その光景を見た時暁と呼ばれた青年は邪悪な笑みを浮かべ、言った。

「分かった。健気なお前達に免じて今回は許すことにしよう。しかし、次は無いぞ。そのことをよく覚えておくことだな」

そして青年はそのコンピュータールームを出ていった。その姿を見

送った後研究者達は、今日も自分の命が無事であることに感謝するのであった。

青年はコンピュータールームを出た後、エレベーターに乗り一階で降りた、そのビルを出た後、徒歩一分の所に巨大な植物園がある。青年は植物園の扉を静かに開けた。

すると、その中央の大きな広葉樹の下で、彼女が座って何かを熱心に見ていた。足音をなるべく立てずに彼女に近づき、そして話しかけた。

「何を見ているんだ、ミキ」

その声に気が付くと、彼女　ミキは青年のほうを向き笑いかけて言った。

「あのね、新しい芽が生えていたの。どんな花が咲くのかなあって色々想像していたの」

その顔を見ていると、先ほどまでの苛立ちが消えていることに気が付く。青年も彼女の横に座り、その新しく生えた新芽を見る。

「どんな花が咲いてほしいんだ？」

すると彼女は、首をかしげて言った。

「なるべくならね、桃色が良いなって思っていたんだけど……。でも水色や橙色なんかも捨て難いよね。ねえ、イマちゃんなら何色がいいと思う？」

青年は彼女に似合いそうな色を頭をフル回転して考えてみる。そして彼女の方を向いて答えた。

「ミキは桃色や水色も似合うけど、私の意見だと夕焼け色が一番良く似合いそうだ」

その答えを聞いて、彼女は顔を綻ばせた。

「夕焼け色かあ。とっても良い色ね！私もその色の花が咲いてほしいなあ」

そして二人はお互いの顔を見て笑いあう。でも彼女はふとしたときに見る彼の横顔がとても気になった。彼の目は悲しみに満ちている。そして彼の横顔は寂しさに満ちている。

彼女は思う。

（イマちゃんは、自分の存在を認めてもらえなかったことを悲しんでいる。そして生みの親である博士が自分を捨ててしまったことで博士を憎んでしまったんだ。だからあんな恐ろしい計画を実行しようとしている……）

彼女は願う。どうか彼を止めて欲しいと。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月21日、午前8時27分。浅庭家二階にて。

私は遠くからのラジオ体操の音楽で目覚めた。日の光がとても眩しい。ひやりと冷たい感触がおでこから感じたので、手に取ってみるとそれは濡れタオルだった。

人の気配がしたのでそちらの方を見てみると、栗色の髪の男の子が椅子に座って眠っていた。そして彼も私の身動きに気付いたのか、大きく伸びをした。

彼の髪が日に透けてキラキラと輝いている。彼は私のほうを向くと笑いかけて言った。

「おはよう。良く眠れた？」

私は思わず顔が熱くなるのを感じた。体にかけていたタオルケットで顔を隠して言った。

「……とても良く眠れました。ありがとうございます」

すると彼は私の顔を覗き込んで心配そうな顔で言った。

「昨日少し熱があったみたいだから心配したけど、もう大丈夫そうだね」

「私の為に看病してくれたの？」

私がそう聞くと、彼は言った。

「だって、普通そうするでしょ？」

どつちやら、私と同じ時の守護者である彼は重度のお人好しのようだった。

第八話 彼の横顔（後書き）

前回の後書きで書いていたことをあまり守れず、本当にすみません……。

次回からはちゃんと二人の話（ときどき幼馴染）を書いていきますので、よろしくお願いいたします！

第九話 眠り姫の事情

西暦2027年7月21日、午前8時35分。浅庭家リビングにて。

現在私は食卓にて二人の男の子に見つめられながら朝食を頂いていた。一人は栗色の髪に整った顔立ちの美少年で、白地に青の染色がなされたワイシャツが彼にとてもよく似合っていた。そしてもう一人はと言うと、どう見ても女の子にしか見えない……。月宮かぐやと名乗った彼の顔を見て私はそう思わずにはいられなかった。

絹のような黒髪のショートヘアに、陶磁器のような白いすべらかな肌。大きな二重の瞳は夢見がちに光り輝いて見える。鼻は高く、唇はとてもつややかである。顔は小顔で、例えるならお人形さんのような可愛さである。

(……何か女として負けているような気がする)

私は彼(彼女?)を見ながらお味噌汁をすすっていた。

すると彼(彼女?)は私を見ながらおもむろに口を開いた。

「今君は僕の顔を見て、絶対女の子だろうって思ったでしょう?」

私は心を見透かされたのかと思った。

彼は続けざまに言った。

「やっぱり。そうだろうと思ったんだよね」
まあ、初対面の人は

皆そうだもの、気にしなくていいよ。でも、間違えられたら悲しくなるからあまりそう思ってほしくはないなあ」

私は彼の悲しそうな顔を見て急に申し訳なく思った。

「ごめんなさい、月宮さん。疑ったりなんてして……」

私の言葉を聞いて、彼は。

「分かってくれたら良いんだよ。じゃあ、けいた。僕はまだ攻略途中のゲームがあるから、暫く家に帰るね。眠り姫ちゃんと話が終わったら呼んでね」

彼はそう言つと、リビングの窓から靴を履いて出て行った。何でそこから？

彼が出て行ったのを見送った後、栗色の髪の少年　浅庭景太君は口を開いた。

「……空野^{そらの}光さん^{ひかり}、だったよね。昨日お互い忙しくて聞けなかったことを聞きたいんだ。話したくないことは話さなくなつていいからさ。君の知っていることを教えてくれないかな？」

私は彼に一つ質問をすることにした。

「浅庭君、君は私が持っているこの“赤の宝珠”と色違いの物を持っているみたいだけど。何処で“それ”を手に入れたの？」

そう言つて私は自分の赤の宝珠をテーブルの上に置いた。

彼は私に言った。

「……この宝石は宝珠っていうものなの？俺はこの宝石のことをよく知らないんだ。ただ家に代々伝わる大事な宝石だから、家の長男が肌身離さず持っていないといけないんだ、って俺は叔父さんに聞いたんだ」

彼の答えは私が想像していたものとは違っていて、思わず驚いてしまった！！

「つまり君は何も知らずに宝珠と契約して契約者兼時の守護者になったってということなの！？信じられない……」

すると彼は逆に私に質問をしてきた。

「空野さん。君が言っている契約者って一体何？」

私は答える。

「契約者というのは、私や君が持っている“時の宝珠”のように、物と契約を交わして人外の能力を使えるようになった人間の総称だよ。具体的に何人いるかは分かっていないけど、沢山いれば世界の法則を捻じ曲げてしまいかねないから、あまりいないと思う」

彼はさらに質問をした。

「じゃあ、時の守護者というのは？そして、その“時の宝珠”というのはまだあるものなの？」

「時の守護者というのは、その宝珠を使って時間およびその時間軸

を歪めてしまわないように管理・守護する者のこと。“時の宝珠”のことは 多分私の憶測だけど、君と私の持つている二つ以外存在していないと思う。“それ”自体も沢山あると契約者同様に世界の法則を歪めかねない代物だから”

彼は暫く何かを考えた後、私に最後の質問をした。

「じゃあ、最後の質問。君はどうしてあの黒い化け物と戦っているの？」

私はその質問に黙り込んだ。だってこの事を話してしまえば“アノ人”の事も話さなければならず、もし話したとしても時間軸に悪影響を与える危険性があるのだ。

私が黙っていると、彼は見かねてこう言ってきた。

「嫌なら話さなくてもいいよ。変なことを聞いてごめん。それより君はこれからどうするの？もし君がよければだけど、暫くこの家で暮らさない？何か深い事情があるみたいだし、それに部屋ならあまっっているんだ」

やっぱり彼はお人好しのようだった。こんな見ず知らずの私を家に泊めるなんてどうかしている。でもその言葉は、私の心に深く染み

た。
「……こんな見ず知らずの私を家に泊めていいの？後悔するかもよ？」

すると彼は笑いながら言った。

「その答えはYESとっていいんだよね」

彼がそう言って笑うので、私もつられて笑ってしまった。

こうして彼と私の奇妙な暮らしが始まったのである。

第九話 眠り姫の事情（後書き）

今回は少し（？）説明チックになってしまいました……。

読者の皆様には読みにくくさせてしまい、本当に申し訳ないです。

次話からニヤニヤ展開が作れるといいのですが、また別の話になってしまいます。

ころころと話が変わってしまい、読みにくいとは思いますがこれからもよろしく願います！

第十話 君が心配させるから（前書き）

前話で日付の打ち間違いがありました。本当にすみませんでした（泣）

第十話 君が心配させるから

西暦2100年7月20日、午前10時23分。東京都某区の地下ライブハウス跡にて。

前は連日人で賑わっていたこの場所も、今では二人の人間しかいない。

そのステージ上で胡坐をかいて、熱心にノートパソコンに何かを打ち込んでいる少女がいた。

茶色の艶のある長い髪をツインテールにしているその少女は、何故か男物のTシャツにハーフパンツという奇妙な格好をしていた。

（前よりセキュリティ強化されてるけど、大丈夫でしょ！）

彼女は驚くべき速さでキーボードを操作していく。すると画面の表示が変わった。

（よし！メインサーバーに侵入成功）

そして用意していたフラッシュメモリをパソコンに挿入し、表示されたゲージが100「%」になるまで待つ。その後セキュリティシステムに見つからないようにサーバーを立ち去る。この目標を達成した後の達成感が好きだった。

彼女が作業を丁度終えたとき、彼が帰ってきた。

「ただいま、結衣^{むすめ}」

彼女は今日も彼が無事であることに安心する。

「おかえり、良樹^{よしき}さん。今日の収穫は？」

良樹と呼ばれた少年は、持っていた袋を彼女の前で見せる。

「あまり沢山は手に入れられなかったけど、これだけあれば三日はもつたる」

彼女は上物の保存食が沢山入っているのに気が付いた。なので彼に質問した。

「これだけの上物どうやって手に入れたの？」

「まあ、オレの実力ってところだな」

彼は胸を張って言った。その言葉に思わず笑ってしまう。

「そんなに笑うなよ……。冗談のつもりだったのに」

「ふふふつ。だって、可笑しかったんだもん」

彼は彼女に真面目な顔で聞いた。

「そういえば、さっき何やってたんだ？」

彼はパソコンの操作がとても苦手だ。だが彼女がさっき何をやってたのかとても気になるみたいだった。彼女は正直に答えることにした。

「えーつとね、ハッキングしてたの。“タイムス”に」

その言葉に彼が驚く。

「マジで!？」

「うん、マジで。それでね、良樹さんや姉さんが動きやすいようにしておいたから」

彼女は嘘はつかないのを彼は知っている。だからその言葉を信じることにした。

「ありがとな、結衣。流石はオレの妹だ」

その言葉を聞いて彼女は言い返す。

「別に、良樹さんの妹だから出来るんじゃないもん！」

彼は彼女ならこれからも一人で生きていけるなと安心する。なので大事な家族に大事なことを言う。

「あんな、結衣。オレさ、ヒカリを探しに行こうと思うんだ。あいつ一人だと心配だからさ。お前は一人でも大丈夫だ。このオレが保障する!だから、行ってもいいか？」

その言葉は彼女にとってあまり聞きたくないものだった。でも、彼の目は真剣だった。

彼女は止めても無駄だと思い、彼に言った。

「……分かった。でも、必ず姉さんと一緒に生きて帰ってくることに」

「！！約束だよ！」

「必ず生きて帰るから、安心しろ。お土産も買ってきてやる！」

大事な妹と約束を交わし、彼は行く。一人で世界を救いに行ってしまった“いとこ”を探した……。

第十一話 祖父からの手紙

西暦2027年7月22日、午前7時00分。浅庭家玄関にて。

俺は先ほど目が覚めたので、玄関脇についているポストを覗いていた。

すると、ある一通のエアメールが来ていたので新聞と一緒に手にとって見る。

宛名を見て俺は驚いて声を出してしまった。

「じいちゃんからだ!!」

俺は今すぐ手紙を見たい衝動を抑え、朝御飯を作り家に戻った。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月22日、午前7時30分。浅庭家キッチンにて。

僕は何やらニコニコ顔でハムエッグを作っているけいたの姿を発見した。

「どうしたの？何か良いことでもあった？」

僕がそう聞くと、けいたは嬉しそうに言った。

「実はさ、じいちゃんから手紙が来たんだ！」

「えっ！？マジでお祖父さんから!?」

ビックリだぜ けいたのお祖父さんから手紙が来るなんて!!

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月22日、午前8時00分。浅庭家リビングにて。

私がリビングのドアを開けると、景太君とかぐやさんが楽しそうに話をしていた。

「今度はどの国に行ったのかなあ？」

「さあ、何処だろうな。見てからの楽しみだな」

私は自分が話に加われないので、少し意地悪な気持ちになった。

(何か疎外感……)

すると二人は私に気が付いたのか、笑顔で挨拶をしてくれた。

「おはよう、ヒカリちゃん。よく眠れた？」

「おはよう、光。ご飯食べる？」

二人のその顔を見ていたら、自分がいじけていたのが馬鹿らしくな
った。

二人はあまり自分のことを言わない私に親切にしてくれるのだ。そ
う思うと、自然と笑顔になれた。

「おはよう、二人とも！景太君、今日のご飯は何？」

「今日は、ハムエッグとポテトサラダとオニオンスープ。食パンも
あるけど食べる？」

景太君は料理が上手だ。昨日の夕ご飯も美味しかった。そのメニ
ーを聞いて私は嬉しくなる。さっきの会話も気になるけど、今は朝
ご飯のほう先だ。やっぱり私って単純だなと思った。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月22日、午前9時00分。浅庭家リビングにて。

俺はいよいよ手紙にはさみを入れた。隣でもかぐやが興味津々で見
ている。

「景太君のおじい様からの手紙ってそんなに珍しいものなの？」

そんな俺達の様子を見て、光が聞いてきた。その質問に俺は答える。

「一年のうち半年以上は旅行に行っている人なんだ。しかも筆不精
だからあまり手紙を送ってくることも無くて、けっこう珍しいんだ」

「へえー、そうなんだ。何というか活動的なおじい様なんだね」

「そんなことより、早く読んでよ！気になるよ」

かぐやが急かしてくる。便箋を開いたら、相変わらずの達筆であった。

* * * * *
* * *

拝啓 そちらは暑さも厳しくなる頃ですが、お元気ででしょうか。

現在私は、中国に旅行に來ています。やはり国民が推定10億人というだけあり、国全体が活気に満ちているという印象です。

中国に來れば友人に会えると思っていたのですが、その考えは甘かったようで今回の目撃証言は0でした。なので仕方なく観光をすることにしました。

まず世界遺産の万里の長城を歩いてみました。想像以上に長く、歩いていると疲れてしまいます。体力の有り余っていた昔とは違ふと思ひ知らされてしまいました。

そして中華料理を食べてみました。本場の味はこんなにも違ふと驚きを隠せませんでした。それほどまでに美味だったのです。

その後中国雑技団の公演を見に行きました。団員の雑技の一つ一つ

に魂がこもっていて、見ていて感動しました。

市場にもお土産を買いに行ったのですが、偽者のブランドバックなどが売られていて驚きました。途中で私にも売りつけられました。少し睨みつけたら売り子が青い顔で逃げ帰ってしまいました。少し複雑な気分になりました。

中国は意外と良い所でした。なので次は近くの韓国に行こうと思います。

機会があれば日本にも寄りたと思います。それまでお元気で！

浅庭景太様

浅庭珪蔵

* * * * *
* * * * *

「相変わらずだな……」

その手紙を読んで俺はそう思った。

「相変わらずだねえ、けいたのお祖父さんは……」

かぐやもそんなことを言っていた。

「何というか、すごいおじい様だね。ところで手紙に書かれていた友人というのはどなたのこと？」

光がある質問をしてきた。俺は答える。

「あゝ、それはね。じいちゃんの旅行している理由の一つなんだ……。何でもじいちゃんには会って一発殴りたい友達がいるらしくて、その友達を探しているみたいなんだ」

「世界中を探し回っているの！？本当にすごい人だね……」

光はそんなことを言った。そのことには俺も同感なんだけど。

「でも、絶対探し出すって言っていたんだよな。じいちゃんは……」

そんなことを光とあっていたら、かぐやは煎餅をかじりながら言った。

「そういえば、けいた。ヒカリちゃんと暮らしていることマサ兄さんに言ったの？」

「ヤバい。言っていなかった！どうしよう……」

俺は大事なことを今の今まで忘れていたことに気が付いた。

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月22日、同時刻。掛井川中央町にて。

「あれっ！あれっ！この鞆の中に入れておいたはずなのに無い！」
ベンチにて鞆の中身をぶちまけている少年がいた。その姿に皆一度はそちらを見た。

彼の髪色は銀色だったからだ。それだけではなく、彼は見惚れるほどの美少年であった。彼は呟く。

「リモコン何処いったんだよ……。何処にいるんだよ、ヒカリ」

新たな波乱がやって来ようとしていた。

番外編 幼馴染コンビに10の質問をぶつけてみた

今日はFuturexRealで活躍されている二人に来ていただきました。

浅庭景太「どうも。今日はどうしたんですか？」

月宮かぐや「どうしたの〜？急に呼び出して」

今日お二人には10の質問に答えていただきたいです。すみませんが協力していただけられないでしょうか？

浅庭「別にいいですけど……。あまり変な質問はして欲しくないなあ」

月宮「何か面白そうだから別にいいよ。どんとかかって来い！」

ご協力ありがとうございます。変な質問はしないので安心してください。

では一つ目の質問。お二人のお名前、生年月日、血液型、家族構成を教えてください。

浅庭「浅庭景太です。8月15日生まれのA型です。家族構成は力ナダに移住している祖父母、叔父、自分の四人家族です」

月宮「月宮かぐやだよ。9月14日生まれのO型だぜい。家族構成はイギリスに単身赴任中のオトーさんと、オカーさんと、僕の三人だよ」

では二つ目の質問。お二人の出会いは？

浅庭「たしか俺が五歳のときでした。たまたまお隣に引っ越してきたのがかぐやなんだよな」

月宮「そうそう！たしか僕が引っ越してきたときに会ったんだよね。懐かしいなあ」

月宮君は掛井川市出身じゃないんですか！？驚きです！

月宮「そうなんだぜ。実は僕東京生まれ。その当時おばーちゃんが病気で入院しちゃって、オトーさんとオカーさんがおばーちゃんの介護をするために引っ越してきたんだ」

浅庭「そのとき近所に同い年の子が一人もいなかったから、遊べる友達が出来ると知ったときは嬉しかったな」

お二人の出会いを知ったところで次の質問にいきたいと思います。趣味、特技を教えてください。

浅庭「趣味は読書で、特技は家事全般かな」

月宮「けいた暗いよ。僕の趣味を聞いて驚け！動画サイトの巡回、W i i で好きなアニメを調べること、ゲームやること、深夜アニメ見ること、イラスト書くこと、Web漫画チェックすること。毎日やることが多くて忙しいぜ！特技は、ゲーム攻略かな」

浅庭「かぐや、その特技って趣味のほうに入るんじゃないのか？」

月宮「けいた、細けえこたあいなんだよ！！さあ次の質問をプリー

ズ！」

浅庭「……………」

……では次の質問にいきます。お互いの恥ずかしい話を教えてください。

浅庭「昔かぐやは髪を腰ぐらいまで伸ばしてたから、結構女の子用のスカートとか履いてたよな」

月宮「……何でそれ言っちゃうのさ、ひどいよけた！！だったら僕だって言っちゃうもんね！！けいたは昔ある女の子にプロポーズされて、意味が分かっていなかったもんだからOKの返事してた！これでどうだ！少しは僕の思いを味わったか！」

浅庭「えっ！そんなことあったっけ！？よく覚えてないけど……………」

月宮「まっ、まさかの0ダメージ！？あれを覚えてないなんて……………、けいた、恐ろしい子！！」

そんなことがあったんですか……………。もっと詳しく聞きたいですが、次の質問にいきます。好きな教科、苦手な教科を教えてください。

浅庭「えーと……………。好きな教科は数学で、苦手な教科は歴史かな。暗記物が苦手です。テストもあまり出来ないんだよなあ」

月宮「好きな教科か。英語は得意だけど、好きではないからなあ。強いて言うなら美術かな。苦手な教科は、勉強するもの全般！！」

浅庭「かぐや……………。お前って奴は、ほんと勉強嫌いなんだな」

月宮「何を言うけいた！テストなんて飾りです。偉い人にはそれが分からないだけだい！！」

自分も分かりますよ、その気持ち。まあ気を取り直して次の質問にいきます。

最近ハマっていることを教えてください。

浅庭「スーパーのポイント集め。あとは懸賞はがきを送ることかな」

月宮「何けた、何でそんなにおばさんくさいの！？」

浅庭「別にいいだろ。お前はどうかんだよ」

月宮「僕は最近クロスワードパズルにはハマってる。あれ結構おもしろいんだよ」

浅庭「かぐやが意外とまともな答えで何か悔しい……」

……では次の質問に行きます。最近自分運ツイてる！って思ったことを教えてください。

浅庭「……生まれてこの方不運続きです。誰か俺に運を分け与えてくれないかなあ」

すっ、すみません！！変な質問しちゃって……。

浅庭「いや、いいんです。俺が変な体質なだけなんで、気にしないでください」

月宮「まあまあ。けいたにもいつか良いことあるよ！気にすんな
そういう僕のほうは、最近道で困っているお爺さん助けたら、チョコ
レートもらったよ」

すみません……。次は当たり障りの無い質問にします。好きな女性
のタイプは？

浅庭「そうですね。心優しい子ですね。困っている人がいたら助け
てあげられるような人がいいです」

月宮「僕はツンデレな女の子がいい。いつもはツンツンしてるけ
ど、二人きりのときはデレデレな子。どこかにいないかな」

……探し出すのは難しいタイプですね（笑）次の質問にいきます。
お互いのことどう思っていますか？

月宮「真面目でいいやつ。そしてかなりのお人好し」

浅庭「性格悪いし、腹黒いけど、根は素直」

月宮「けいた、僕のことそんな風に思ってたの！？そんなに性格悪
くないもん」

浅庭「そうやって可愛らしい顔をつくって、仲間を増やそうとして
いる時点で性格悪いよ……」

お二人は本当に仲がいいですね。そんなお二人に最後の質問です。
これからも二人は親友でいられますか？

浅庭「まあかぐやといると退屈しないし、俺が元気が無いときも励

ましてくれるし、時には喧嘩もするかもしれませんが多分こいつとは一生縁が切れないと思いますね」

月宮「それは僕も同感だね。でも僕はけいたが離れろって言うても絶対離れてやらないけどね（笑）」

ご協力ありがとうございました！本当にお二人の信頼の深さが分かりました。これからも二人で頑張ってください！！

第十二話 銀髪の少年 【前編】（前書き）

前回悪ふざけをしてしまい、すみません……。
今回から本編に入ります！

第十二話 銀髪の少年 【前編】

西暦2027年7月22日、午前9時30分。掛井川市中央町の街中にて。

オレはそのベンチに座ってかれこれ30分間絶望していた……。妹に大見得張ってこの時代まで来たというのに肝心のリモコン（途轍もなく大事なもの）をどこかに落としてしまい、元いた2100年にも帰れなくなってしまった。

それだけではなく周りから変な目で見られるし、そもそもこの時代にヒカリがいるのかさえ怪しい……。それにあっちのお金はこの時代では使えないので、飲み物すら買えない。

しかし、こんなところで諦めてたまるかあ！！

「とりあえず、ヒカリを探す！話はそれからだ」

そう声に出すと、段々自分のやるべきことが見えてきた。ベンチから立ち上がり、歩き出す。周りの目は気にするな。どこにいるかは分からないが、気配を探知すれば見つけられる可能性もある。

まずは街を出る。ごちゃごちゃしたことは後で考える！それがオレの長所であり、短所でもある。

（待ってるよ、ヒカリ！必ずオレが迎えに行くからな！！）

* * * * *
* * * * *

西暦2027年7月22日、同時刻。浅庭家リビングにて。

俺はつい先ほどかぐやにある問題点を指摘され、携帯電話を前に考えていた。

実は俺の叔父さんこと浅庭あひなは政二郎まひじろうさんは、悪事や隠し事をしようものなら本気で怒る今時珍しい熱血漢なのだ。

(どうすれば、叔父さんに分かってもらえるかなあ。難しいな……)
そんなことを思っていたとき、手に持っていた携帯電話が鳴った。
急いで電話を取る。

「はいもしもし。浅庭です」

『よお、景太！元気だったか！』

何と電話の相手は叔父さんだった。俺は自分に冷静になるように言い聞かせ、電話に応じた。

「どうしたの、叔父さん。仕事のほうは大丈夫？」

『今ちょうど休憩時間になったからさ、お前に電話でもしてみようと思っただ。かぐやの面倒は見てくれるか？』

「それはいつものことだから慣れてるよ。それより……叔父さんに言わなきゃいけないことがあるんだ」

俺は背中に冷や汗が流れるのを感じた。心臓は今にもはじけそうな

ほど高鳴っている。

『何だ？言ってみる。叔父さんがドンと受け止めて、ってもう休憩時間が終わりそうだな……。すまん、景太。話はまた今度だ。また電話する！じゃあな！』

「ちょ、ちょっと待って！！叔父さん！」

『プツッ、ツッ、ツッ………』

唐突に電話が切られた。俺は思わずため息をついた。かぐやが煎餅を食べながら聞いてきた。

「マサ兄さん何て言ってたの〜？」

「時間がなくてまともに話が出来なかった………」

かぐやは煎餅の最後のひとかけらを食べ終わった後言った。

「いいじゃん！しばらく考える時間が出来たんだし、のんびりこうぜ！もしけいたが怒られることになったら、僕も一緒に怒られてあげるからさあ」

かぐやがそういうことを言うと、何故かなんとかなるような気持ちになってくるのが不思議だった。光が申し訳なさそうに言った。

「ごめんね、景太君。私が居候させてもらっているばかりに、迷惑をかけてしまって」

ヒカリのその顔を見てみると、ふいに父さんの言葉が浮かんだ。

『女の子はか弱く繊細なものだ。だから女の子を困らせるようになるとはするなよ』

父さんの言葉を思い出した俺は、光のほうを向くと笑顔で言う。

「大丈夫だ、光。叔父さんは確かにこわいけど、本当はすごく良い人なんだ。だから、そんなに困った顔をしないで。俺が何とかするからさ！」

そう言うと、光が笑顔になった。その顔に思わずどきりとしてしまう。

すると光が遠くに思いをはせるように言った。

「何か景太君って、私のいとこの子に似てる気がする。ときどき発する言葉の一つ一つが似ているなあって思うときがあるの」

光が初めて自分のことを話してくれた。そのことが何故か嬉しかった。

するとどこからともなく手にオレンジジュースを持ったかぐやが言った。

「……………キミたち。僕のこと忘れてないかい？何かすぐーくこの空間の中に居ずらいのだが、どういうことかなあ？」

「じっ、じめんかぐや！ー忘れていたわけじゃないんだぞ！ー！」

「かぐやさん、じめんなさいっ！ーただ景太君とお話してただけなの！ー」

「……ふーん。なら良いんだけどねえ」

俺は何故か不機嫌なかぐやの機嫌を直すことにした。

「かぐや、今から買い物行かないか？お前の好きなもの買ってやるぞ」

すると、かぐやは。

「えっ、本当に！？じゃあ、ハーゲン　ッツのアイスも買ってくれる？」

……少しリッチな買い物だが、仕様がな。俺は少し多めに財布にお金を入れた。

「よし、アイス買いに行くか！！」

「待ってる！！ハーゲン　ッツ！！」

俺たちは光に留守番を頼み、近くのコンビニに行くことにした。

後にこの行動が彼と俺たちを引き合わせてしまうなんて、このときは全く想像していなかったのである……。

第十三話 銀髪少年 【後編】

西暦2027年7月22日、午前9時40分。浅庭家リビングにて。

私は景太君とかぐやさんに留守番を頼まれ、リビングのソファに座っていた。

そしてあの日のことを思い返す。

(何である時、もう少し優しく言えなかったのかな……。私って馬鹿だ)

私はずっとあの日のことを後悔している。大事ないとこの少年を傷つけたあの日のことを。

* * * * *
* * * * *

西暦2100年7月19日、午後4時34分。東京都某区の地下ラ
イブハウスの入口前にて。

「本当に、一人で行くのか!？」

彼は信じられないといった顔で、私を見た。私は答える。

「うん、そうだよ。これ以上“アノ人”の好き勝手にはさせられな
いからね」

そう言うと私は天高くそびえ立つあのビルを見た。

私と同じようにあのビルを見ていた彼は、視線を私に戻して言った。

「でも、一人じゃ絶対危険だ！せめて、オレも一緒に連れてけ！！」

彼は私を説得させるように言った。確かに彼がいれば私は安心できる。

でも、彼のことを本当に頼りにしているあの子のことはどうなってしまうのだろうか。

彼はそういう根本的なことを全く分かっていなかった。そんな重要なことを全然考えていない彼を見ると、何だかムカムカと無性に腹が立って来た。私は彼に事の重大さを分かってもらったため、あえて強い口調で言った。

第十四話 一触即発

西暦2027年7月22日、午前9時42分。掛井川自然公園にて。

俺は現在銀髪の美少年と、女と間違われて怒り心頭のかぐやが互いに睨み合っている場面を、木陰のベンチで見ている。

（俺が下手に何か言ったら、取り返しがつかなくなりそうだよな…）

そう思いながら傍らに置いてあるハーゲン ツツアイスの様子を見る。まだ溶けてはいないことに安心した。しかし、銀髪の彼とどうやって喧嘩しようというのだろうか。

俺はかぐやに一応聞いてみることにした。

「かぐや、一人で平気か？」

するとかぐやは、怒っているときに出す少し低めの声で言った。

「大丈夫。僕の実力くらい、けいたは知ってるでしょ。あんな勘違い男すぐに倒してやる……」

その言葉を聞いた彼は、声を荒げながら言った。

「倒されんのはてめえに決まってるんだろ。1分でけりつけてやる！」

このままでは喧嘩から殺し合いになってしまいそうなので、俺は二人の間に入って条件を決めることとした。

「まず、ルールを決めよう。相手を降参させたら勝ちということにしよう。刃物類の使用は厳禁だ。正々堂々と戦えなかった場合失格とする。時間は一分間の一本勝負。その時間内に決着がつかなければ引き分け。これでどうだ、二人とも？」

俺のルールを聞いた二人は。

「しょうがねえか。まあルールだからな。飲んでやるよ」

「けいたが決めたら僕はそれに従うよ」

渋々だが納得してくれた。そうと決まったら勝負の開始だ。

「じゃあ、勝負始めっ！」

* * * * *
* * * * *

彼の一撃は思った以上に強いことが分かった。食らったら一発で気絶するであろうことも。

だから僕はわざわざ彼の拳を食らうことはしない。

「ちょこまかと、逃げてんじゃねえ！」

僕は彼の繰り出す打撃を全部避けていた。拳が風を切る音が耳元で響く。

(そろそろ、反撃するかなあ)

僕は数回バック転して、彼と一定の間合いを保つ。すぐに全神経を足に集中させて、彼の間合いまで走る。そして彼の横腹へ蹴りを放った。それが見事にクリーンヒット！
そしてまたバック転して距離を保つ。彼は僕の喧嘩に怒り心頭のをうだった。

「てめえ、ふざけてんじゃねえぞ!!」

「僕は普通に喧嘩してるだけだよ。君も頭使えば？」

すると、2「m」離れている僕に向かって彼は拳を振った。僕は正直彼を舐めていた。
が、内臓を潰されるような衝撃が僕の腹を襲った。僕はあまりの激痛にその場に倒れる。

「じほつつ、がはっあ!!」

彼は僕の方に邪悪な笑みを浮かべて言った。

「てめえがせこい真似すんだったら、オレだって手段選ばねえわ。オレの必殺技受けて 目の前から消えろ」

急に昔のことばかり思い出してきた。これって走馬灯かなあ？
まだやってないゲームがあるんだけどなあ。それに今年こそは
けいたの誕生日を祝うつもりだったんだけど……。

彼が僕にトドメを刺そうと近づいてくるのが分かった。僕は痛みに動くことも出来なかった。彼の拳が 僕に振り下ろされた。

* * * * *
* * * * *

オレはこのクソ生意気な野郎にトドメを刺そうと拳を振り下ろしたはずだった。
がしかし、オレの拳はある物で阻まれていた。それは……大きな鎌だった。

「……君の行動が目に残ったから、止めさせてもらった」

その鎌をいとも簡単に操っているやつがオレの目の前にいた。さっきの茶髪野郎だった。

「てめえ……何のつもりだ！入ってくんじゃねえ！！」

「これ以上、かぐやに手を出さないでくれないか？」

そう言うと茶髪は、そこで倒れている生意気野郎を介抱した。

「……何で助けたの？」

「助けるのに理由なんて要らないだろ。良いから休んでろ」

「ごめんね、けいた」

そう言って茶髪は奴に肩を貸すと、近くの木の手幹まで運んだ。

「……こんな奴でも俺の親友なんだ。だから、これ以上いじめないでやってくれ」

そう言うと茶髪は、オレのほうを向き直って言った。

「もしこれ以上こいつに危害を加えるのなら、そのときは俺が君の相手になる」

そう言いながら、こいつはオレのほうに大鎌を向けてきた。その目は真剣そのものだった。

「分かった。これ以上手え出さねえよ」

オレは、拳を納めた。茶髪は大鎌をこっちに向けるのを止めた。

「ありがとう。やっぱり君は悪い人ではなさそうだ」

茶髪はオレのほうを向いて言った。

「……何でそう思うんだよ？オレはこいつを本気で倒そうとしたんだぞ？」

オレは、木の幹で体を休めている生意気野郎を指さして言った。

「だって君は、かぐやに手加減してくれただろ？あの衝撃波　その気になればもっと威力出すことも出来たんだろうけど、君はそれをしなかった。それが一つ目の理由。二つ目は見ず知らずの俺が持っているこの宝石のこと。君はこれが使い方を誤れば危険をもたらす物だと知っていたから、自分に渡せって言っていたんだよね。だからかな。君が悪い人ではないって思ったのは」

その言葉を聞いて思わず呆れてしまった。

「……お前って、かなりのお人好しじゃね？」

俺がそう言つと、茶髪は言った。

「よく言われるよ。自分ではそんなつもりはないんだけど」

「……………おい、君達。僕のこと忘れていないかい？」

そんなことを二人で話していたら、生意気野郎が口出しして来やがった。

「チツ、生きてやがったか。しばらく気絶させてやるつもりでやっただが」

「さっきまで気は失ってたけどね。ねえ、けいた。さっきの話本当なの？彼が僕に対して手加減してたつて言つ」

その問いに対してオレの目の前にいる奴は答えた。

「あくまで俺の憶測だけどね。ところで、かぐや。お前体のほうは大丈夫なのか？」

茶髪が生意気野郎に問うと、生意気野郎は答える。

「まだ、お腹らへんが痛いけどそれ以外は大丈夫だよ。それよりさあ、けいた。君は僕に何か隠し事をしてないかい？さっきの大きな鎌はどうやって出したの？そこらへんを詳しく教えてほしいなあ？」

そのことでオレは思い出した!!

「そう言えば、てめえ時の宝珠と契約してるだろ!!と云うかお前”それ”どこで手に入れやがった!? オレは赤の宝珠以外見たことねえぞ!!」

そう問いただすと、茶髪はめちやくちや困った顔をした。

「えーっと、それは……その……」

「質問に答えやがれ!!」

「話してもらっよ、けいた!!」

すると茶髪は、こう言い逃れしてきやがった。

「とりあえず、ストップ!!一旦家に帰ろう!!そのほうが話しやすしい、二人とも心置きなく俺に質問できるだろ?それに、かぐや。アイスはどうした?」

「そうだっ!!アイス!!リッチなのに溶けてたらどうしよう!?!」

「その件なら大丈夫だ。溶けないようにしておいたから」

家に行く、か……。何て無用心な奴らなんだ。オレがもしも悪人だったらどうするつもりなんだ?などと思っていたら。

「そういえば、君の名前は?俺は浅庭 景太って言うんだ。でそっ
ちのは」

「月宮 かぐやだよ。性別は男だからね。今度は間違えないでよ。名前まで教えてきやがった。どうしてそんなに無用心なんだか。まあ、名乗られたなら名乗るしかねえか……。」

「……佐久樂 良樹だ。てめえらマジで無用心でお人好し過ぎだ」
こうしてオレはこのときから、月宮と浅庭のツッコミ役兼ヒカリの
フォロー役となるのだった。

第十五話 いとこ同士

西暦2027年7月22日、午前10時05分。浅庭家リビングにて。

オレは現在ヒカリに睨まれていた。睨まれるならまだいい。ヒカリの背中に何やら黒いオーラが見える。オレには見える。

（あれはやばい。絶対対怒っている……）

まさに蛇に睨まれた蛙状態だった。オレは外部に助けを求めることにした。

チラツとキッチンのほうを見る。ちょうど浅庭がアイスをガラスの器に盛り付けているところだった。

オレは目で助けを求める事にした。浅庭もこちらに気が付いたようだった。

（今すぐこの場を和やかにしてくれ！！）

そう願ったのだが、こいつには通じなかった。オレの視線に気が付いたまではない。

だけど、笑顔で手を振って欲しいんじゃない！助けろってオイ！！だが、オレの願いは奴に届くことはなかった。奴はキッチンの奥に行ってしまった。

ヒカリのほうに視線を戻すと、背中のおーラがやばいことになっていた……！！

(何かダークネスな雰囲気になってやがる!?)

オレがこうしてヒカリの様子をびくびくしながら、見ているのには訳があった。

* * * * *
* * *

西暦2027年7月22日、午前9時56分。浅庭家玄関前にて。

オレは普通より少し大きいよなあとと思う家の前に来ていた。洋風な佇まいのその家は、見たところ三階建てぐらいだった。浅庭は月宮に肩を貸して、オレの隣を歩いていた。

「じゃあ俺はかぐやを家に届けてくるから、君は俺の家に入ってるよ。かぐや、行くぞ」

「まだ僕はお腹が痛いんだから優しくしてよ、けいた。まあ僕も痛みが治まったら、けいたの家に行くからアイス取っというてよね」

そう言うと二人はオレにアイスを預け、浅庭の家の隣 昔ながらの日本家屋という佇まいの木造平屋建ての中に入っていった。まずは無用心な奴らだ。

オレはアイスが入ったビニール袋を持つ。すると何か違和感に気が付いた。

すぐにアイスを袋から取り出してみる。アイスは全く冷たくなかつ

た！

（アイスの時間だけを止めてある！？だから『アイツ溶けないようにしておいた』って言ったのか！！この時間全体じゃなく、アイスだけ時間を止めるなんて）

「……只者じゃねえな。アイツ」

オレは今までで一番厄介な契約者に出会ったと思った。しかし自身でそんなことに気が付いていないなら、ますます厄介な奴だ。

オレはそんなことを思いながら、浅庭の家の呼び鈴を鳴らした。どうやらインターホン形式ではないようだった。

（なんつーレトロな代物なんだか）

中から軽快な足音が聞こえてくる。そして玄関のドアが開かれた。

「どちら様でしょ……って、よし君？どうしてここに？」

「何でヒカリがここにいるんだ！？」

中から現れたのは、オレが探していた“いとこ”だった。

* * * * *
* * * * *

そして、ヒカリの機嫌が悪くなり現在に至る。

オレは戦々恐々としながら、ヒカリの様子を見ていた。するとヒカリが重い口を開いた開いた。

「……よし君。私は最後に君に会ったとき、何て言ったか覚えてる？」

オレはヒカリに対してびくびくしながら答えた。

「そりゃあ、アレだろ。あの崖からうんぬんの後で、オレしか結衣を守れねえから傍にいてやれってやつだろ。そんぐれえ覚えてる」

「……じゃあ何で私に付いてくるかなあ、全く」

オレの言葉を聞いたヒカリアは、その言葉を言うため息をついた。そしてオレのほうを向いて言った。

「結衣ちゃんはどうしたの？あつちに置いてきたの？」

「しばらくは外に出なくてもいいように食料を置いて出てきた。あともしものときの為に、オレの気力をこめた金属バットも置いてきた。それがあれば一般人でもタイムロスぐらいは退治できるだろ。それと一応アジトにも結界を張っておいたから侵入される危険もない」

オレはヒカリアにそう言った。ヒカリアは何やら難しい顔をして言った。

「結衣ちゃんは何て言ったの？」

「自分一人でも大丈夫だ、って」

それを聞くとヒカりは、こう言った

「まったく結衣ちゃんらしい。どうせ悩んでいるよし君のこと放っておけなかつたんだろうなあ」

「本当に自慢できる妹だ」

「君が胸張って言う台詞じゃない!!まったく結衣ちゃんは君に甘いんだから……」

そう言うとヒカリの背中のおーラが見る見るうちに消えていく。そしてオレのほうを見て言った。

「本当はよし君にひどいこと一杯言っただけで帰らせるつもりだったんだけど、結衣ちゃんに免じて許すことにする。でもこっちは勝手な行動は絶対許さないから!!」

そう言ってヒカりは微笑んだ。あつちではそんな顔を見せてなかったから、オレは思わずドキリとした。

ちょうどそのとき浅庭がアイスをトレイに乗せて出てきた。

「かぐやが皆で食べる、って言ってたからさ。一応三人分盛り付けてみた。チョコレート、チョコミント、ストロベリーがあるけど、ヒカりはどうする?」

「私はストロベリーがいいな。よし君は?」

オレに話が振られて驚いた。

「何でオレの分なんて、作ってんだよ……」

オレが浅庭に問うた。するとこいつは。

「だって光の友達みたいだったから。アイス嫌いだった？」

そうやって悲しそうな顔をするこいつを見ていたら、何かオレが悪いことをしているみたいになった。なのでオレは。

「べつ、別に嫌いじゃねえし。で、オレはどれを選べばいいんだ？」

そう言うと浅庭はほっとしたように胸をなでおろした。

「そっか、良かった……。アイスは好きなのを選んでいいよ。俺は残ったのを食べるから」

「お前が盛り付けたんだから、お前が選べばいいだろ」

そんな些細なことで押し問答になる。そんなくだらないことで笑い合える。

この時代もいいもんだなと、オレは密かに思った。

第十六話 犬猿の仲？

西暦2027年7月22日、午後2時15分。浅庭家リビングにて。

俺は現在二人の人物に、見つめられていた。一人は俺の幼馴染兼親友の月宮かぐや、そしてもう一人はつい先ほど出会ったばかりの銀髪の少年 佐久楽良樹君である。

「さて大馬鹿野郎もロゲインしたところで、洗いざらい話してもらおうとするか……」

「その大馬鹿野郎って、君のこと？僕全然分からないなあ？」

二人はテーブルを挟んで仲良く座っているのだが、どうにも雰囲気
が怪しい……。

よく見ていると椅子の下でお互いの足を蹴りあっているし、見えな
い火花が飛んでいる。

（この二人、犬猿の仲か？顔に笑顔を張り付かせながら、お互いの
足を蹴りあっているし……。はつきり言って、この光景すごくシ
ュールだ）

俺は敵対心丸出しの二人に、とりあえず話を振ってみることにした。

「あのさ、二人は俺に何が聞きたいの？とりあえず何でも答えるけ
ど」

すると、二人は何やら話し合い始めた。

「先どつちからこいつに聞くんだよ？オレ、先がいい」

「何寝言言っちゃってんの？先にけいたに質問するのは僕に決まってるでしょー！」

「ハア！？ふざけんなよ！！契約者でもねえお前が何で先に質問すんだよ！オレに決まってるだろ！てめえは後に質問すりゃあいいだろーが」

「そつちこそ契約者だか懸賞金だろうが知らないけどさあ……。後から出てきたくせに、何威張っちゃってんの？この世の中、順番っていうのがあるの知らないの？これだからゆとり世代はやだねえ」

「……てめえ、言わせておけば　ぶつ潰す！！」

「かかってきなよ、相手してやる！！」

話が変わな方向に行っている気がする……。とりあえず家の中で暴れられたら困るので、止めに入ることにした。

「二人ともストップ！！順番ならジャンケンで決めればいいだろ。そんな小さなことで喧嘩するなよ……」

そう言うと二人は言い争いを止めた。そして、ジャンケンの細かいルールを決め始める。

「コンマ1秒でも出し遅れたら、後出しと見なすからな。分かったか」

「秘技グーチヨキパーは使用禁止だからね。そこんところ忘れない

「でよー」

そこまで細かく決めなくても……。お前ら小学生かよ。
そう思ったが口には出さないでおいた。そして、ジャンケンがスタート。

「最初はグー！ジャンケンポイ！！」

そして勝敗は、一発で決まった。

* * * * *
* * *

最初は、かぐやが先に質問するらしい。まあ当然の結果といえよう。

「じゃあ、先に質問するぞ！！けいた、覚悟せよ！！」

「どうぞ、何でも聞いてくれ」

二人でそう話していたら、佐久楽君がかぐやを指差して言った。

「ふざけんな！！てめえ何でそんなにジャンケン強いんだよ！？」

その質問をかぐやが答えようとしていたが、俺が先に答えた。

「佐久楽君。君はジャンケン神を知っているかい？俺の推測なんだけど、かぐやはそのジャンケン神に愛されたやつなんだと思う。今までかぐやにジャンケンで勝った人が一人としていないのがその理

由の一つだ」

「そんなふざけた話があるか！！オレは絶対信じねえぞ！！あとオレのこと佐久楽君なんて呼ぶな！下の名前で呼びやがれ！君付けは無しだ！」

ああ君は俺たちの話にツッコミを入れるのが上手いみたいだね……。だけど、苗字で呼ばれるのは嫌なんだな。一つ勉強になったよ。

そんなことを考えていたら、かぐやがドヤ顔で佐久 良樹に言った。

「フン、ざまあみる！！僕にジャンケンで勝てるやつなど皆無なのだよ。分かったか、よっくん！！」

うん？よっくん？良樹の愛称か？かぐやにしては結構ましなネーミングだな……。
などと思っていたら。

「てめえ、『よっくん』なんて幼稚園児みたいな名前でオレを呼ぶな！！！」

彼には通じなかったらしい。大声で反論してきた。その言葉にかぐやが反撃してきた！

「でも、ヒカリちゃんには『よし君』って呼ばれてたじゃないか！
！僕とヒカリちゃんを差別するな！！！」

「ヒカリはヒカリ、てめえはてめえだ！だったらオレだって、てめえのこと馬鹿宮って呼んでやるわ！！！」

ああ、君達……。質問はいつになるのかな？

俺はいつ質問に答えられるかなあと、二人の言い争いを聞き流しながら思ったのである。

第十七話 質問タイム

西暦2027年7月22日、午後2時30分。浅庭家リビングにて。

「つまり、けいたはその宝石　青の宝珠と契約して契約者っていうのになった。でもさあ、それって本当なの？はつきり言って嘘くさいよ」

僕は現在幼馴染兼親友のけいたから、朝の不可思議なことの説明をしてもらっていた。

何でもけいたはヒカリちゃんに出会った時に、タイムロスなんて妙な奴に襲われていたらしい。

ここまでの話でも信じることは難しいだろう。だけど、その時けいたのベルトについていたその青い宝石が光って大きな鎌になった。そしてそのタイムロスをやっつけた。

それで僕がよっくんに襲われているときに、助けなきゃと思ったらその大鎌が出てきた。

その鎌で、よっくんの攻撃を止めた。

なんて漫画やゲームのような話をされちゃあ、誰がそんなのを信じるのか？

いくら親友の話でも、“それなんてアニメ？面白いの？”レベルにしかないじゃないでしょ。

などと思っていたんだけど……。

「つまりお前は、タイムロスを倒すために契約者になった、って言うのか！意外とお前良い奴じゃねえか」

おい、その銀髪！！よくその中二病な話を信じるなあ。君の脳みそは中二病で一杯なんだねえ。流石ゆとり世代。感心しちゃうよ、全く。

僕は隣の席で熱心に聞いているよっくんを心の中でなじった。

僕は疑り深い眼差しをけいたに向けた。けいたは困った表情で言った。

「かぐや、お前が信じられないのはよく分かる。だけど、これは実際に起きたことなんだ。頼む、信じてくれないか？」

……けいたは嘘はつかない。それはよく分かってる。ずっと一緒にいた親友だから。

でもそんな嘘くさい話は信じられないよ。何よりその話を信じてしまったら……。

僕と、けいたが”違う人間”だ、って認めることになっちゃっじゃないか……！！

「……僕は信じないからね、そんな話！けいたの、馬鹿！」

僕はリビングのドアを開けると走って玄関に行った。

珍しくけいたの家の玄関から外に出た。その途端、信じられないことが起こった……！！

僕の目の前に黒いもやみだいな変な生き物が沢山いたのだ！！
そして、僕に襲い掛かるうとしていた！

(やっぱり、けいたの話は本当だったのかあ。変なところで意地張っちゃったな……)

今日は本当に災難続きだ。やっぱり僕って嫌な奴なんだな。そんなことを思ったときに、奇跡は起こった。

* * * * *
* * * * *

「おい、馬鹿宮！しつかりしろ！このボケ！！」

僕の頬をバシバシたたいてくる嫌な奴　　よっくんが僕の顔を覗き込んでいた。

「痛いよ、マジで！手加減はなしなの！？」

なぜかかけたの家のベッドの上にいた僕は頬をさすりながら上半身を起き上がらせた。

そして文句を言った。すると、よっくんは僕のほうを向いて言った。

「ていうか、お前はつきり言ってやばいな。タイムロスに8割方食われてたのに生きてるってどうよ？お前もしかして特異体質か？」

「えっ、僕あの黒い奴に食われてたの！？マジで！？」

そう言つとよっくんはさも涼しげな表情で言った。

「嘘に決まってるんだろ、バーカ！！食われてたらとっくにこの世か

ら存在ごと消えてるっつーの。お前が氣い失っている間に浅庭が全部やつつけてたんだよ」

けいたが僕を守ってくれた？そういえばけいたがいないことに氣が付いた！

「ねえ、よっくん！けいたは？」

そう聞くと、よっくんは。

「リビングだ。さっさと仲直りしてこい。お前から仲良いんだからよ」

僕は急いで階段を駆け下りた。そしてリビングのドアを勢いよく開けた。

けいたは本を読んでいた。僕に氣が付くと心配そうに言った。

「かぐや、体の具合は」

「けいた、話信じなくてごめん！！僕、けいたと“違う”って思いなくなかった！だから、信じなくなかったの。ごめんよ」

けいたが話し終わる前に謝ってしまった。やっぱり僕って嫌な奴だ。そう思っていたら。

「……馬鹿だな、かぐや。俺はお前が無事で良かったって思ってる。もう氣にしてなんかいないよ」

そうけいたは笑って言うてくれた。僕はけいたに言った。

「助けてくれてありがとう！君はやっぱりお人好しだねえ」

やはりけいたは僕と同じ人間だったことに安心した。僕のそんな様子にけいたはおかしくなって笑っていた。けいたが今も昔も変わらずに僕のヒーローでいてくれて、このときは本当に嬉しかったのだ。だから、あんなことが起こるなんてこのときは思っていなかったんだ……。

第十八話 学生の本分

西暦2027年7月25日、午前9時08分。浅庭家リビングにて。

俺はいよいよアレをやり始めないとまずい、とカレンダーを見て思っていた。俺の周りで起こった不可思議な出来事や、現在俺の家に住んでいる二人の客人のことで頭が一杯だったのだが、そろそろ片付け始めないと大変なものがあるのを思い出した。

俺の勉強机の上に乗っかっている横綱 夏休みの課題を片付けなくては。俺はのん気にレーシングゲームをやっている親友月宮かぐやの隣に座って、こう言ってみた。

「あのさ、かぐや。そろそろ夏課題を片付け始めようと思うんだが」とすると、かぐやは途端に顔を真っ青にさせた。そしてコントローラーの操作を誤り、自分が動かしていたレーシングカーをクラッシュさせた。

隣では「よっしゃあ！勝った！」と言って良樹がコントローラーを片手にガッツポーズを決めていた。勝ってよかったね！と俺は心の中で拍手を送った。

かぐやは顔をこちらに向けた。眉間にしわを寄せて涙目になっているこいつを見て、少し怒らせたかな？と俺は己の身を心配させた。

「……ひどいよ、けいた！僕よっくんにもう少して勝つところだったのに……！」

かぐやは開口一番にそう文句を言った。だがこんなところで折れて

はいけない、と俺は心を鬼にしてかぐやに言った。

「確かに、さっきのゲームの件は俺が悪いと思っている。だが、かぐや。もうそろそろ片付けないとまずいものが俺たちの目の前にある。一緒に勉強しないか？」

かぐやは俺の言葉に一瞬肯定の返事をしようとした。しかし顔を横に振ると言った。

「僕は勉強という鎖で僕を縛ろうとするけいたなんて、嫌いだあ！」

そしてコントローラーを俺に投げつけ、仏間へと逃げ込んでしまった。

俺たちの様子を見ていた良樹は、俺に言った。

「お前ん所の学校の宿題って、そんなに多いのか？」

そう聞いてきたので、俺は厳しい現実を良樹に見せることにした。テレビの前のガラステーブルの上に課題を説明しながら並べていく。

「まずこの一冊250ページある問題集が全部で5冊。解答が書かれた冊子は無し。教科は基本科目5教科。そして、理科の自由研究が模造紙1枚と説明のレポート。説明のレポートが最低20枚。美術課題が一枚でお題は夏の風物詩または思い出。技術課題は本棚の作成。形は自由で、制作方法をレポート用紙5枚に書く。体育課題は体力づくりと書かれているが、基本的にはやらなくても良し。音楽、家庭は課題は無し。これで全部だけど、良樹の学校はどのくらい課題が出る？」

これを見て、良樹はポツリと一言。

「この量は、はっきり言って無えだろ」

彼はことの重大さを分かってくれたようだ。あとは肝心のかぐやをどう説得するかだ。

「今年はどうやって説得させるかなあ。去年は大変だったから、今年は穏便にいききたいよな……」

そのときちょうど光が起きて来て、眠そうに目をこすりながら一言。

「おはよう、二人とも。今日の朝御飯はなあに？」

何て平和な日常だろうか。この横綱さえなければ、だけど。

* * * * *
* * * * *

けいたが「夏課題をやるう」なんて地獄のようなことを言うので、僕は仏間に逃げ込んだ。ここなら、けいたが無理やり入ってくることもないので、安心である。

僕はお仏壇の目の前に正座をして、あの金属の鐘みたいなやつを鳴らして、手を合わせた。そして、お仏壇の上部にかかけられている写真の一番右側を見た。

そこには、けいたによく似たスーツ姿の栗色の髪の男性がいた。僕

はその写真をしばらく見つめた。

「……圭一兄さんなら、僕の言いたいこと分かってくれるよね」

僕は本当のお兄さんのような存在だったその人に語りかける。こういふときは彼が傍にいてほしかったと、その写真を見て思った。

* * * * *
* * * * *

「ごちそうさま。相変わらず景太君のご飯は美味しいね」

朝御飯を食べ終わった光が俺にそう笑顔で言ってくれた。そう言われると、とても嬉しくなった。食器を片付けてくれた光は、俺の行動を見てこう聞いてきた。

「景太君、今何を作っているの？何かのお菓子？」

そう、今俺はかぐやを仏間から出す“あるデザート”を作っていた。食べ物で親友を釣るのは少し気が引けるが、背に腹はかえられないのだ。俺は光のほうを向いて言った。

「釣り餌を今作っているんだ。光と良樹の分も今作っているけれど、出来たら食べる？」

それを聞いて、ヒカリは顔を綻ばせた。

「うん、食べたい！出来たら教えてね！」

そう言っつて光はキッチンを後にした。そして最後に飾り切りのりんごをのせて完成。その出来栄えに自分で拍手を送った。

あとはこれでかぐやが釣れるかどうかにかかっている。俺は気を引き締めて仏間に向かった。

* * * * *
* * * * *

僕が仏間に籠城を決め込んでいると、襖の向こうからけいたの声がした。

「かぐや、話があるんだけどいいか」

僕は断固として課題なんてものをやりたくなかったので、けいたに言った。

「僕は今課題なんてやりたくなんてないからね！だって夏課題なんてけいたが終わったのを写したほうが楽チンだもん！」

そう言っつたら、けいたは優しい声で言った。

「去年はそうやったけれど、今年の問題集はかなり厚いから、お前の力が必要なんだよ。今年は一緒に横綱を倒さないか？」

そう言われても、僕は絶対ここを動かないぞ！って思っていたら、けいたは続けざまに言った。

「かぐやの為にジャイアントパフェ作ったんだけど、かぐや食べるか？もし要らなかつたら良樹にあげようと思うんだけど……」

何っ！？ジャイアントパフェだと！？そんなのよっくんに渡してたまるか！！

そう思っただけで動こうとしたけれど、先ほどのことを思い出し踏みとどまった。

そんな僕の考えをよそに、けいたはこう言った。

「……かぐやが食べないと溶けるぞ、アイス。一応キンキンに冷やしてあるけど、溶けるの早いからなあ」

アッ、アイス！！どうしよう、僕が救出しないと彼らの命が！！でも、課題はやりたくない！！

僕はアイスもといジャイアントパフェを救出するか、課題をやるかの究極の二択を迫られてしまった……！！

僕の頭の中で究極の二択がせめぎあっていた。どちらをとる　　どうする僕……！！

僕はしばらく、無い頭で悩み一つを選択をした！

* * * * *
* * * * *

俺の交渉が聞いたのか、かぐやが仏間から出てきた。

「けいた、汚いぞ！食べ物で僕を釣るとは、何たる仕打ち！！」

かぐやは仏間から出た瞬間、俺にそう抗議をしてきた。けれど俺は涼しい顔でこう言っただけだ。

「そんなこと言ったら、数学写させてやらないぞ」

そう言うと、かぐやは急に慌てて言った。

「そつ、そんな鬼のようなことはしないで！！ぼくが悪かったから許して！！！」

俺はかぐやに別に怒ってないと言っていると、急に怒り出した。

何とかなだめてリビングに連れて行く。今年の横綱は早く片付くな、と俺はほっと胸を撫で下ろした。

第十九話 “あの御方”と彼女

西暦2100年7月25日、午前10時16分。東京都某区の超高層ビルおよび植物園にて。

天高くそびえ立つそのビルの最上階の応接室に、一人の青年と、ある女性が向かい合っていた。

全身黒い細身のスーツで身を包んだその青年は、眼鏡の奥に隠れている鋭い瞳で、その女性を見据えていた。女性は艶やかな赤い着物姿で、赤みがかっている長い髪を一つに結っている。腰には一本の竹刀を携えている彼女は、一目見れば誰もが見惚れるような美しい女性であった。

彼女は、その青年がどのような命令をを発するのかと緊張しながら待っていた。彼は彼女のほうを見据えて、口を開いた。

「契約者が一人この時代からいなくなった。何か知っていないか？
アスカ」

彼女 アスカは想像していた内容とは、異なっていることを青年が質問してきたので、内心驚いた。が、顔には出さずに答える。

「……詳しいことはまだ分かっていませんが、時の守護者の少女と何らかの関係があった模様です。また詳しいことが分かり次第、お伝えいたします。時暁様」

その答えを聞いて、青年は口角を少し上げた。どうやら進んでいなかった計画が前進したらしい。青年は先ほどよりも優しい声音で、アスカに命令した。

「アスカ、命令だ。植物園にいるミキを呼んできて欲しい。あまり急いでこなくてもいい。ミキの体に何かがあるといけないからな」

その命令を聞いて、アスカは胸が締め付けられるような思いだったが、命令は絶対だ。逆らったら死が待っている。彼女は顔には出さず、答える。

「分かりました。必ずお連れいたします、時暁様」

そして彼女は最上階を後にした。胸の苦しさは治まってはくれなかった。

* * * * *
* * * * *

植物園の扉を静かに開けると、都会とは思えない沢山の自然が目に見え、飛び込んできた。

その緑が広がる空間の中央、大きな広葉樹の下で一人の女性が、植物にじょうろで水をやっていた。

その女性はその存在全てが白で統一されていた。白く美しい長い髪に、雪のような透き通る柔肌、白いワンピースに身を包んだその女性にはまるで天使のような可憐さを持ち合わせていた。植物園の緑と彼女の存在とのコントラストはとても美しかった。

その女性　ミキは、アスカの存在に気が付くとじょうろを置いて、こちらに近づいてきた。

「アスカちゃん、どうしたの？あなたがこの場所に来るなんて珍しいね」

ミキは天使のような笑みを浮かべて、アスカに言った。彼女はミキに優しい声で言った。

「ミキ様。時暁様が最上階まで来て欲しい、とおっしゃられています」

その言葉を聞いて、ミキは何かを思い出したかのような顔をした。そして言った。

「いけない！彼に呼ばれていたのをすっかり忘れていたわ！ありがとう、アスカちゃん。急いで行かないと！」

走ってその場を去ろうとするミキを、アスカはその手を掴んで止めた。

「ミキ様。急いで来なくてもいい、と時暁様はおっしゃられています。あなたを走らせてしまえば、私がああの方に罰を下されてしまいます。少し落ち着いてください」

そう言うと、ミキはアスカの手を握って言った。

「大丈夫！今日は体の調子がいいから。それに、もし彼がアスカちゃんにお仕置きをしようとしたら、私が守ってあげるから心配しないで！」

そしてミキはアスカの手を引っ張って、植物園の扉を開けて走り出

した。

走る彼女に手を引つ張られているアスカは内心思っていた。

（やっぱり私ごときがミキ様に敵うはずがない。だってお二人は遠目から見てもお似合いで、私は“あの御方”の笑ったお顔を見たことすらないのに。ミキ様と一緒にいるだけで“あの御方”はとても嬉しそうで、私は　それが悔しい……）

彼女が思いを顔に出すことはない。胸の苦しさはなかなか治まってはくれない。

彼女はその感情を、手を引つ張られて走っていることを理由にして、誤魔化すのであった。

彼女の思いが顔に出るのはいつの日か　。それは世界だけが知っている。

第二十話 ミキとイマイ

西暦2092年6月21日、午後2時34分。東京都某区の研究施設内の一室にて。

私と彼は、博士の地道な研究の末に生まれた。博士は、最初は私達の誕生を喜んだ。だが、私達の生態を知った瞬間に、私達を地下の奥深くに封印した。

私は、博士の行動は正しいと思った。私達は、“存在してはいけないうモノ”だったから。私は、博士を恨めなかった。私は博士に捨てられてしまったけれども、博士のことが大好きだったから。

でも、彼は違った。彼は、私にこう言った。

『何で、自分達は捨てられた？』

『勝手に生み出しておいて、危険な生物だと分かったら、勝手に捨てる……。人間は何で自分勝手に醜い生き物なんだ』

彼は私に向かって、そう呟いた。その後しばらく彼は、何も喋らなかった。彼と二人でいた地下の奥深くは、とても静かな空間となった。

ただその場所は暗くじめじめとしていたけれども、どこか緊張感が漂っていた。

彼がその緊張を破ったのは、確か一週間後のことだった。

彼は私の肩を両手で掴んで、こう言った。

『なあ、ミキ。二人であの男に復讐してやろう！……いや、人類に復讐するんだ！二人なら、きつと出来るさ』

そう言う彼の目は血走っていて、憎しみに溢れていた。私は彼を止めることが出来なかった。

どうしてあの時、彼を止められなかったのかな……。私はその時のことを思い出しても、後悔ばかりしている。

* * * * *
* * * * *

西暦2100年7月25日、午前10時22分。東京都某区の超高層ビルの最上階にて。

私はアスカちゃんとエレベーターに乗って、この最上階の応接室の扉の前まで来た。アスカちゃんには扉の前で待ってもらい、私は重厚な雰囲気のある木の扉を叩いた。中から返事が聞こえたので、私は断りを入れて中に入る。黒い細身のスーツを着こなしている彼が、牛革素材の立派な一人掛けの椅子に座って、こちらを見ていた。

彼 イマイは、私の大切な親友で家族で、そして私のたった一人の大切な人。

彼は椅子から立ち上がると、私のほうに向かってゆっくり歩いてきた。私の顔を覗くと、こう言った。

「今日は顔色が良いみたいだな、ミキ」

彼が私の体調を心配してくれたみたいで、私の心は温かくなる。私は笑顔で言った。

「今日は体調がいいの。ここまで走ってこれたのよ、すごいでしょう！」

そう私が言うと、彼も笑顔を浮かべて言った。

「そうか、それは良かったな」

そう言うと、彼は私の頭をを優しく撫でた。私は、彼に頭を撫でられるのが好きだった。そうしていると、彼は私の髪を一房優しく掴むと、何かを私の髪に結んだ。

目をそちらに移してみると、橙色のような黄色のような曖昧な色のきれいなリボンだった。私は彼が髪を結んでくれたのが、とても嬉しかった。

「ありがとう、イマちゃん。とっても嬉しい！」

「……たかだかりボンだぞ。そんなに嬉しいのか？」

彼は私の言葉に、照れていた。私は彼の手を握って、目を見て言った。

「イマちゃんが私の為に選んでくれたんでしょう？それだけで私は幸せ者だよ」

私の言葉を聞いて、彼は少し顔を赤くしていた。私はそんな彼の顔

を見て、笑う。
そして、思う。

イマちゃん……。私は人間を恨んでなんかいない。私はあなたが
れば、他は何も要らない。復讐なんて止めて欲しいの。元の優しい
あなたに戻って欲しいの。

『ただ、それだけが望みの。』

彼女の気持ちは彼に届くことはない。彼が彼女の気持ちに気づかな
いから。

彼女は長く生きられない。それが彼女の希望だから。

二人の気持ちはすれ違ったまま、運命の歯車は回り続ける。悲劇の
方向に。

第二十一話 セカイを救う条件（前書き）

投稿がだいぶ遅れてしまってますみません……。
次話はなるべく早くあげられるように頑張ります。

第二十一話 セカイを救う条件

西暦2027年7月25日、午前10時22分。浅庭家二階景太の部屋にて。

「ダメだ……。これは僕の理解できる範疇を超えている!!この暗号は誰にも解けないに決まっている!!」

「大丈夫。この式は公式を使えば、楽に解けるぞ。ほら、こんなかんじで」

現在俺達は夏課題のうちの一つ、数学の問題集に手をつけていた。夏課題の中で一番難易度が高いのが、数学なのだ。俺は半分ほど進んだのだが、肝心のかぐやのほうはと言つと。

「……全然分かんないよお。こんなの授業でやったっけ？」

先ほどから全然ページが進んでいない。なので俺が少し解き方を教えているのだ。

だがそれでも、かぐやは頭を抱えたままうんうんと唸っているので、仕方がなく答えを問題集に書き写していく。するとかぐやは。

「おおー、ページが見る見るうちに埋まっていく!!ありがとうございます、けいた!!」

目をキラキラさせながら、お礼を言ってきた。そして、一言。

「頭使ったからお腹がすいた〜!!何かおやつ作って〜」

……こいつは勉強より、食欲が勝っているのか。仕方がない。何か作ってやるう。

そう思い、俺はキッチンへと向かうため、階段を下りたのだった。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。浅庭家一階リビングにて。

『今日の一位はうお座のあなた！！意中の男性に思いを告げるチャンス到来！！ラッキーアイテムはピンクのハンカチだよ』

私は現在テレビの前のソファに座りながら、ニュース番組を見ていた。今日から景太君とかぐやさんは勉学に励むと言うので、私はこうして暇を持て余していた。

それにしても、どうしてニュース番組の最後を飾る占いコーナーは、こんなにも適当なことしか言わないのだろうか？

そんなことを思っていると、掃除機を持ったよし君が一言。

「ヒカリ、お前好きなヤツとかいたっけか？」

「……いないけど。どうして聞くの？」

するとよし君は、ほっとしたような残念なような変な顔をした。どうしたんだらう？

「……そっか、そうだよな。お前にはそんな暇ないよな」

そんなことを言いながら、よし君は掃除機をひたすらかけていく。そこ、さっき掃除してなかったっけ？私は明らかに拳動不審なよし君に、聞いてみた。

「そう言うよし君は、好きな人いないの？よし君、結構もてるのに……」

そう聞くと、よし君は掃除機をかける手を止めた。

「……いねえよ、そんなやつ。お前以外は」

「何か言った？よく聞こえなかったんだけど」

そう言うのと、よし君は強引に話を変えた。

「そつ、そう言えば、前にお前が言った“世界を救うための条件”。あれ、全部揃ったのか？」

そう言えば、よし君には全部説明してなかったことを思い出した。

「……“アレ”ね、まだ全部の条件が揃っているわけじゃないの」

その言葉を聞いて、よし君は顔色を変えた。

「大丈夫なのかよ！？そんな悠長にかまえてて！！」

「落ち着いて、よし君。これは焦って行動すれば手に入るものではないの。私はこれまでに第一の条件　この時代に私ができること、

をクリアした。でも第二の条件には、まだ時間が空いているの」

「第二の条件って何だ？」

私は彼の目を見つめて言った。

「8月の上旬から中旬にかけて、一人の心を救うこと。これが第二の条件」

8月まであと少しと迫っていた。私と“アノ人”の戦いはもう火蓋を切っていた。

私はこのとき、まだ知らなかった。“アノ人”の計画は、私の想像を遥かに超えていたこと。条件と感情を天秤にかけてはいけなかったこと。

そして、私が“ある感情”を知ってしまったこと。

第二十二話 きょうだい

西暦2099年6月3日。“アノ人”に異変が起こり始めたのは、ちょうどその日からだった。

最初はちょっとした物忘れからだった。それから段々物忘れもひどくなっていって、昨日の記憶も曖昧なほどになった。このままではいけないと思った私は、“アノ人”を様々な病院に連れて行った。しかし、どんな優秀な医師に診せても異常はないと言われてしまった。

“アノ人”は性格まで変わっていった。私はただそれを見ていることしか出来なかった。

そして、最後には私のことも忘れてしまった。

“アノ人”は今、恐ろしい計画を実行しようとしている。私はそれを阻止しなければならない。例えそれが私の命を使うことになっても、私は“アノ人”を止める。

その為にお母さんは、私を命がけでタイムスから逃がしてくれたのだから。

* * * * *
* * * * *

西暦2100年7月26日、午後2時25分。東京都某区の超高層ビル近くの植物園にて。

一人の女性が、植物園の中央にある大きな広葉樹の下で、しゃがんで何かを見ていた。赤い着物を身に着けた長い髪を一つに結っているその女性　アスカは、どこか上の空のように見える。

その入り口を覗きこんでいる一人の少年がいた。だが、その少年は夏だというのに黒い長袖のＴシャツに膝丈のズボン、足にはサンダルという奇妙な出で立ちだった。そして目の部分に黒いハチマキを着けていた。

少年は、自分では完全に気配を消していると思っていた。

が、しかし彼女には全て分かっていたようで。

「……サクヤ？そこにいるの？」

バレていた。やはり彼女にはかなわない……。

そう思った少年は、潔く彼女の前に現れた。

「やっぱりお姉ちゃんは、すごいね。どうして僕がいるの分かったの？」

少年　サクヤは、アスカに不思議そうに聞いた。アスカはさも当たり前前に答えた。

「だって気力探知すれば、どんな契約者がすぐに分かるじゃない。特にサクヤ。あなたは私の家族なんだから、分かって当たり前よ」

そうだった。契約者は、他の契約者の気力を探知できるのだ。すっかり忘れていた。そのことを思い出すと、それを今まで使っていない

かった自分がおかしくなつて、笑ってしまった。

だが肝心のアスカはというと、顔にあまり変化は見られなかった。それを見てサクヤは、笑うのを止めた。アスカは、サクヤに先ほどと同じ無表情で、問いかけた。

「そつえば、サクヤ。私に何か話したいことがあるの?」

……心まで読まれていた。やはり彼女にはかなわない。サクヤは、アスカに質問をした。

「契約者が一人逃げた、つて本当?」

「……本当よ。どこから聞いたの?」

サクヤはこの件に興味があった。が、この情報は“タイムス”でも機密事項として扱われていて、ごく一部の関係者しか知らされていない。

……地雷を踏んだ。そうサクヤは心の底で思った。しかし、アスカは。

「……まさか、サクヤの耳にも入っていたとはね。確かに機密事項だけれど、あなたには言ってもいいかも知れないね」

そう言うと、アスカは少しずつ話し始めた。

「逃走した契約者の名は、佐久楽 良樹。どうやら時の守護者の少女と親戚関係にあつたらしいの。まだ詳しいことは分かっていないのだけれど、この少年は別の時代に逃げたみたい」

それを聞いて、一瞬耳を疑った！！

「別の時代に！？そんなの有り得ないじゃないか！！時の守護者以外は、時間を渡るなんて不可能だよ！」

その言葉を聞いたアスカは。

「そうなのだけれど。この少年は時の守護者の親戚関係。時間を渡る術を心得ていたのかも知れない」

それを聞いたサクヤは、心の底で思った。

そんなことが出来たら、皆苦労しないよ、と

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。東京都某区の地下ライブハウス跡内にて。

ツインテールの少女は、目の前にある四角いエレベーターのような物体の内部を物色していた。

「やっぱり良樹さんは、見当たらないか。と言うことは、この時空間移転装置は作動したことになるよね」

少女は一通り物色したのち、あることに気が付いた。

何故か、兄が持っているはずの制御装置　リモコンが、内部に残されたままだったのだ。それを見た少女は、思わず叫んだ！

「良樹さん、リモコン忘れてる……!!!!」

兄が現在どうしているのか一気に不安になった妹であった……。

第二十三話 海老煎と時転装置

西暦2027年7月27日、午前11時07分。浅庭家リビングにて。

「やっぱりリビングは良いね。エアコンが最高だぜい」

「とか言っているけど、さっきから全然進んでいないぞ……。本当に危機感持っているのか、かぐや」

現在俺は、かぐやがリビングの方が落ち着いて勉強が出来ると言うので、リビングに移り課題を進めていたのだがー。肝心のかぐやの手は、止まったままだった。今なんか勉強を放棄して、寝転がりながらTVを見ている。本当に課題を終わらせる気があるのだろうか……。

「危機感？何それ、美味しいの？全く、けいただって課題終わってないくせにい」

かぐやは、どこからか持って来た海老煎の袋を開けながら、そんなことを言った。

なので俺は、能天気な彼に現実を見せることにした。テーブルの上に、数字と理科の問題集を置いた。

「……けいた、数字の問題集をやっているんじゃないの？」

俺は、残酷な事実を彼に告げた。

「実は、もう数字は終わっているんだ。あと理科も。今は、苦手な

歴史の問題集をやっている途中」

かぐやは、驚きを露にした。

「……うっそだあ。いくら学年一位のけいただって、こんな分厚い問題集を二冊も終わらせるなんて無理でしょ」

そう言いつつ、額には汗が滲んでいる。そして目がすごい泳いでいる。彼は、明らかに動揺していた……。

かぐやは、俺がテーブルの上に置いた問題集を手に取り、中をパラパラと見始めた。

一通り中を見終わった彼は、俺に向かって一言。

「けいた。僕と一緒に課題をやり始めたのに、何で先に進んじやうのさ……。悲しいじゃないか」

彼は、本当に悲しそうだった。なので俺は、肩を落として落ち込んでいる彼に、言った。

「解答間違っているかも知れないけど、良かったら写しても良いぞ」

そう言うと、かぐやは下げていた頭を一気にガバツと上げて、目をキラキラさせて俺を見ていた。

あからさまに喜んでいるのが、目に見て分かった。

「けいた、君は本当に良い奴だな。僕は君のような親友をもてて幸せ者だよ」

とても良い笑顔でそんなことを言われると、少し嬉しい気持ちになった。

先ほどとは打って変わって上機嫌のかぐやは、俺に海老煎の袋を向けて言った。

「食べる？」

俺は断りを入れて、袋から海老煎を一つ手に取り、口に入れた。海老煎は、海老の香ばしい香りと味が口いっぱい広がって、美味しかった。

* * * * *
* * *

同日、同時刻。浅庭家二階、良樹の部屋にて。

「ねえ、よし君。前から聞きたかったことがあるんだけど、時転装置でこの時代まで来たんだよね。ちゃんと作動した？」

ヒカリは団扇をあおぎながら、そう聞いてきた。オレは部屋の窓を開けながら、その質問に答える。

「ああ。オレは機械の操作は苦手だから、そこは結衣にやってもらったんだけどな。ちゃんと動いたぞ。……ただ問題が一つあって、乗っていると酔う。とてつもなく気持ち悪くなる。あれは、何とかした方が良い」

オレ達が現在話をしているのは、オレがこの時代まで来るのに使った“時空間移転装置”のことである。時空間移転装置 略して時転装置。またの名をタイムマシンと言う。

“彼”とオレの妹の結衣が作った、二人の努力の成果である。
そして今 “彼”はオレ達の最大の敵である。

……嫌なことを思い出しまつた。オレは気分を変えるべく、ヒカ
リに話をふつた。

「オレもヒカリに聞きたいことがあるんだ。お前が言ってる“世界
を救う条件”って、どこの情報なんだ？」

オレがそう聞くと、ヒカリは少し困ったような顔をした後に、躊躇
いがちに口を開いた。

「……声が聞こえるの。優しい声が、頭に直接響いてくるの。誰が
言っているのか分からないのだけど、その声に従って私は行動して
るの」

聞いてみたはいいものの、良く分からない……。まあ時の守護者つ
ていうのは他の契約者とは一線を画す存在らしいから、オレ達には
分からないことも分かるのだろう。

とりあえず今のところは、ヒカリだけに聞こえる条件をクリアして
いく他はないのだろう。

オレはそう思い直すことにした。開けた窓からいい風が入ってくる。

しばらくは気を張る生活をする必要はないと思ったオレは、掃除を
しに掃除機を取りに行くことにした。こんな生活が出来るだけ長く
続けばいいと心から思った。

第二十四話 妹と死にたがり（前書き）

未来編です。しばらく続きます。

第二十四話 妹と死にたがり

西暦2100年7月28日、午前9時07分。東京都某区の大形ショッピングモールにて。

白色のキャスケットを深くかぶり、男物のTシャツにデニムのパンツという出で立ちの私は、どこからどう見ても男の子にしか見えな
いだろう。現在私こと佐久楽 結衣は、食料調達の為ライブハウス
跡からさほど遠くないこのショッピングモールに来ていた。

タイムスが世の中をめちゃくちやに引つ掻き回して以来、東京都心
は人の姿はない。東京に家を構えていた人のほとんどが地方に疎開
していった。残った人たちの多くは、地方に頼れる知り合いがいな
いか、それがタイムスに親や身内を取られて疎開するに出来ない状
態のどちらかである。

(……………まあ地方に疎開しても、時間稼ぎにしかないんだけど)
私は後者の方である。両親はタイムスに反逆しようとして捕らえら
れた。助け出そうにも嚴重な警備体制に、自衛隊も顔負けな軍事力
を保持しているタイムスに敵うはずもない。

……………なので私は、ヒカリ姉さんと良樹さんが世界を救ってくれるの
を信じて、待つしかないのである。少ししんみりした気持ちになっ
てしまったので、頬をたたき笑顔を作る。ガッツポーズをとり、元
気よく言ってみる。

「曇り空だけど、心は晴天！今日も元気よくいってみよー」

そして私は魔窟へと足を踏み入れるのである。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。大型ショッピングモール内にて。ある少年の視点。

「はい、三千元ね」

俺はその金額を見て驚愕を露にした。必死こいてあちこち駆けずり回って、鉄の端材推定3「kg」を持ってきたのに、この安さは正直言つてあんまりである。

「ちょ、ちょっと待つてよ!?俺一生懸命集めてきたのに、それはないんじゃないんですか?もうちょっと色をつけてくれたっていいじゃないですか……」

俺が反論すると、褐色肌のごつい男は一睨みしどすの聞こせた声で言ってきた。

「ああん?文句あんなら売らなくて結構だぜえ?俺にケチつけたらここでは生き残れないこと良おく覚えてたら、の話だけだよ」

そう言われると、引き下がるしかない。俺は手渡された三千元を財布に入れ、資源買取屋を後にした。

(三千元か……。保存食買えるかなあ、酒買って帰らないとだし。闇市行くしかないか)

頭の中でいろいろ考える。顔の傷が痛む。いつも苦勞してるのは俺なのに、父親おのひとは俺の苦勞も知らずに殴る。家に帰りたくない。だが帰らないと、また殴る。

……気が狂いそうだった。死にたい。母さんみたいに。でも駄目だ、まだ死ねない。こんな狂った世の中で死ぬわけにはいかない。もっと平和になってからだ。

(我慢だ、我慢……)

『アト、ドレクライ我慢スレバイイ？アト、ドレクライ殴ラレル？』
暗い気持ちに囚われそうになる。心が制御できなくなる。

そんな時、横から怒鳴り声が聞こえた。

「こいつ女だ！！捕まえる！！」

「やめて！！放して！！放してよ！！」

見ると、茶髪の女の子がごつい男二人組に手を掴まれていた。男達は何やらやばい顔をしていた。先ほどまでちらほらと人がいたのに、今は誰一人としてこの場にいない。

あの資材屋でさえ、物陰に隠れていた。

「……助けて！誰かあ！」

助けなきや。自然と体が動いていた。売れ残った1「kg」の鉄屑が入った買物袋を振り回す。

「その子を放せええええ!!」

買い物袋は男の頭にクリーンヒット!!そのまま袋を投げつけた。怯んだ男が手を離れた瞬間、彼女の手を引いて逃げた。

「待てやああああ!!ゴラアアアア!!」

頭を押さえながら男二人がすごい形相で追ってくる。命がけの鬼ごっこが始まりだ。

第二十五話 逃走中！（前書き）

少し残酷な描写を含みます。苦手な人はリターンしてください
(> | <)

第二十五話 逃走中！

西暦2100年7月28日、午前9時30分。東京都某区の駅に近い大通りにて。ある少年の視点。

どうしてこうなった？こんなことになるとは、誰が想像しただろうか。

俺は彼女の手を引っ張って走りながらそう思っていた。

「逃げてんじゃねええええ！！ぶっ殺すぞメエエエ！！」

まさか、あの二人組に仲間がいたとは、誰が想像しただろうか！！現在の様子を説明すると、俺達の後ろに五人のごつい男達が鉄パイプ片手に追いかけてきている！！

(……俺は殴られ慣れてるからいいけど、彼女は安全なところへ逃がさないと！！)

彼女の方を見ると、顔には疲労の色が見えている。

「ごめんなさい。巻き込んでしまって……。あなたは何の関係もないのに」

彼女は息を切らせながら、俺に謝ってきた。俺は前を向いたまま、言った。

「いいんだ。目の前で困っている人を放って置けないよ。それにあの二人組は、この辺じゃ有名なごろつきだ。君みたいな可愛い子がそんなワルの前にいたら、絶対危ないことに利用されてた。これは

俺の勝手な自己満足なんだ。君が気にする必要はない」

……何だろう。自分の気持ちを正直に言っているのだけど、とても恥ずかしくなってきた。

俺は顔が熱くなるのを感じた。そのまま彼女の手を引き、細い路地に入った。

と、そのとき彼女が何かに蹴躓いて転んでしまった。俺は彼女を介抱しようとして、後ろを振り返った。

路地には俺たちの他に誰もいなかった。俺と彼女は顔を見合わせてほっと胸を撫で下ろした。

* * * * *
* * * * *

同日、同時刻。先ほど二人が走っていた大通りにて。

一人の少年が先ほどまで狩猟モードに入っていたごつい男達に向かってゆっくり歩いてきた。目全体を黒いハチマキで覆っている彼は夏だと言うのに黒い長袖パーカーを着ていた。見た目は小学生ぐらいのごく普通の少年だというのに、彼の周りは異様な雰囲気に包まれてた。少年は腰に着けていた皮のナイフ入れから、大人が使いそうな大きさのサバイバルナイフを取り出しながら、男達にこう語り始めた。

「ねえ、生物にはどれくらいの価値があると思う？ そうだなあ、例えばさ植物を草食動物が食べる。草食動物を肉食動物が食べる。こっついのを食物連鎖って言うじゃない？ この食物連鎖に唯一入って

いない生物がいる。僕達人類だ。と、言うことは僕達は何者にも食べられない。つまりは食べられるという恐怖　生存本能をよく知らないんだよ。えーっとなが言いたいかというとな

そこで少年は一旦言葉を切った。と、同時に彼を包んでいた異様な雰囲気も消え去った。男達の一人　リーダー格はチャンスだと思っただ。こんな訳の分からないことを語りだす気味の悪い少年をボコボコにぶちのめす為に、勢いよく鉄パイプを振り回しながら叫んだ。

「訳のわかんねえこと言ってるじゃねえクソガキがああああああああ！！！！！」

リーダー格が少年のほうに突っ込んできた。そのとき少年が閉じていた口を開いた。

「　君達は草食動物で、僕が肉食動物っていうことだよ。馬鹿なお兄さん達」

リーダー格の頭部がきれいな放物線上に飛んだ。

ゴトンという音を立てて、男の頭部はコンクリートの地面に落ちた。リーダー格の体は首から大量の血液を放出しながら、頭部と同時に地面へと倒れこんだ。血液がコンクリートの地面を真っ赤に染め上げていく。少年の持っていた銀色のナイフの刀身は真っ赤に染まっていた。少年の服も赤い汚れが広がっていく。だが彼の顔には何の表情の変化も見られなかった。ただ淡々と一人の男の死体を眺めていた。

「うわあああああああ！！逃げろおおおおおおお！！」

少年はその男達の後姿をただ眺めていた。そして持っていたナイフの刀身を死体の服で拭き取ると、ズボンのポケットから携帯を取り出し最愛の人へ電話をかけた。

「もしもし、お姉ちゃん？あのねえ服汚しちゃった。ごめんね。ああ、すぐ本部に戻るから心配しないで。うん、分かった。じゃあね」

電話を切ったあと少年は呟いた。

「無駄なものを切ってしまったあー。お姉ちゃんには内緒にしておこつと……」

曇り空だけが三人の様子を見ていた。

この三人の運命が変わるときは来るのか。それは神だけが知っている。

第二十五話 逃走中！（後書き）

投稿が遅れてしまいすみません（；；）

色々ネタに詰まってしまって、なかなか筆が進みませんでした（苦笑）

今度からもう少し早くあげられるといいのですが……。

もう少し未来編が続くこととなりますが、ご了承ください。

第二十六話 願いと、決意

西暦2100年7月29日、午前9時45分。駅近くの錆びれた公園にて。

私は先ほど石に躓いて膝を擦りむいてしまったので、駅の近くにある公園のベンチに座らされていた。

「こんな擦り傷放っておいても大丈夫」と私は彼に言ったのだが……。
彼は「傷が化膿してバイ菌が入ったら大変だ」と言って傷の手当てをするための薬を探しにどこかに行ってしまった。

「……本当に大丈夫なのに、心配性なのかな？」
私は一人そう呟いた。そう言えば良樹さんも心配性だったなあ、と遠くへ旅立った兄のことを思い出してしまった。

兄は大丈夫だろうか。リモコンを忘れて慌てているかなあ。光姉さんと合流できただろうか。

寂しさが体を襲った。兄に会いたい。励まして欲しい。頭を撫でて欲しい。でも、兄はいない。この壊れてしまった世界を救う為に遠くへ行ってしまった。

「良樹さんに会いたいよう……」

ずっと我慢してきた涙が頬をつたった。それから堰を切ったかのように、涙が止めどなく溢れだす。我慢しなきゃいけないのに。“寂

しい”なんて思っては駄目なのに。
様々な感情が涙に乗っかって零れ落ちた。必死で泣き声を押し殺している、目の前に灰色のギンガムチェックのハンカチが差し出された。

ぐしゃぐしゃの泣き顔のままハンカチが差し出された方を見ると、先ほどの彼の姿があった。私は彼が渡してくれたハンカチで、目頭を押さえた。彼は私の目を見ながら、少しづつきらぼくに言った。

「泣きたいときは、我慢しなくても良い……と思う」

そう言うと彼は、私の目の前に座ると持っていたビニール袋の中から、消毒液と清潔そうなガーゼを取り出した。彼は無言で私の傷口に、優しい手つきで消毒液を染み込ませたガーゼを私の傷口に当てた。そして処置を終えると、私の傷口に絆創膏を貼った。よく見るとピンク色の絆創膏で、可愛い花柄のプリントがしてあった。

彼は私から少し距離をとって、ベンチに腰掛けた。私の顔を見ながら、彼は言った。

「公園の入口で君のほうを見たら、何かを抱え込んでいるように見えた。俺が言うのも何だけど、あまり無理しないほうが良いと思う。感情は、我慢しては駄目だ。泣きたいときは、思い切り泣けば良い。嬉しいことがあったときは、思い切り笑えば良い。そうすれば少しは気が晴れる……と思う」

そつえば……久しぶりに泣いたおかげか、少し気が紛れたような気がした。私は色々とお世話になった名前も知らない彼に、笑顔を作ってお礼を言った。

「今日は、本当に有り難う。君のおかげで本当に助かった。……も

し良かったら、名前教えてくれる？」

私がそう言うと、彼は寂しそうな顔をしながら言った。

「別に大したことはしていないから、お礼なんていいよ。君は自分の力で、彼らから逃げた。そういうことに、しておいて欲しい。あと……俺の名前なんか、知らないほうが良い。そして君の名前も、俺は知らないほうが良いのだと思う」

そして彼は右腕にしてあった腕時計を見たあと、少し焦りながら言った。

「そろそろ、家に帰らなきゃ。本当は君を途中まで送っていきたいけど、俺はこの後用事があるから……ごめん。この公園を出た後、大通りではなく、裏道をまっすぐ歩いていけば、少し治安が安定している地区へ行ける。そこまで行けば、多分安全だと思うから。じゃあね、気をつけて！」

そう言うと、彼は駆け足でその場を去っていった。私は彼の姿が見えなくなったあと、手に持っていたハンカチの存在に気が付いた。返そうと思ったけれど、名前も知らない彼にどうやってハンカチを返せばいいのか分からない……。

「返しそびれちゃった……」

何とか彼の手がかりを掴もうと、ハンカチの裏を見てみると、黒い刺繍糸で控えめにイニシャルが縫いつけられていた。口に出して読んでみる。

「T・S……」

またいつか会える時が来たら、彼に自己紹介と一緒にハンカチを返したい。

そう思うと、少し元気が湧いてきた。曇り空を仰いで願った。

「また彼に会えますように……………」

それまでは、絶対に死ぬわけにも捕まるわけにもいかない。

必ず、生き抜こうと少女が強く誓った日だった。

第二十七話 浴衣とゴミ箱と自己紹介

この世には、“神”と呼ばれる者がいる。だが、余程のことが無ければ“神”には会えないだろう。それどころか一生かけても会えないかもしれない。それでも人は“神”がいることを信じている。目に見えない物を、存在すると考えること。人間の想像力って凄まじいよね。改めて考えると、これって本当に凄いことだと思う。

……話がだいぶ逸れてしまったね。つまり俺はこういうことが言いたいんだ。『人間の想像力や、誰かを思う力には、現実をねじ曲げる力を持つ』

まあ分かる人に簡単に言えば、“契約者”とかが代表例だね。

何で、“契約者”のことを知っているのかって？

それはね、俺が“神”に近い幽霊だからかな？

* * * * *
* * * * *

西暦2100年7月29日、午前9時50分。東京都某区の超高層ビル内にて。

私は時暁様の言いつけにより、とある部屋の前に来ていた。深呼吸をして、重厚な作りの扉を数回ノックすると、「はい」と言う声が聞こえた。少し緊張しながら、扉を開ける。

「失礼いたします、ミキ様。体のお加減はいかがで……」

言おうとして、思わず固まってしまった。この部屋の主が、凄い状況になっていたからだ。

「あつ、アスカちゃん！ちょっと、助けて！コレ、どうやって着ていいか分からなくて……。手伝って欲しいの！」

この部屋の主　ミキ様はふくらはぎまで伸びる髪を振り乱しながら、そんなことを言った。浴衣を自分で着付けようとして、失敗してしまつたらしい。浴衣はマント状態、桃色の帯はどこかの強姦魔に襲われたのかというような、ぐしゃぐしゃの見るも無残な状態だった。

そして着付け失敗の浴衣からは、豊かな胸元やスラリとした美しいおみ足が顔を覗かせている。

（意外とスタイルがいいのですね、ミキ様……。羨ましい）

私はつい自分の胸元と、ミキ様の胸元を見比べてしまった。私のその様子を見て、ミキ様は小首を傾げた。小首を傾げても可愛らしいなあ、と私は自分の仏頂面を少し恨んだ。

するとミキ様が何やらつまらなそうにしているので、私は急いで彼女の着付けに取り掛かった。

* * *
* * *
* * *

「すごい！これが日本の伝統衣装かあ。ワンピースも良いけれど、
こういう格好も良いね。アスカちゃんがいつも着物着てるのも納得
だね」

うつすらと水色の染色に、夕焼けのような淡い色合いの水玉模様が
散りばめられた浴衣を着て、ミキ様は何やら嬉しそうだった。彼女
の笑顔は、周りを幸せにする力が宿っているに違いない。私は彼女
の眩い笑顔を見ながら、そんなことを思った。

「とてもお似合いです。この浴衣は、ご自分で選ばれたんですか？」
私はそうミキ様に質問した。彼女は首を左右に振って、こう答えた。

「彼が選んでくれたの。元々私が『浴衣着てみたい』って言ったの
が始まりなんだけどね」

その答えに一瞬胸にむかつきを覚えた。が、心のゴミ箱にその感情
を放り込んだ。

部屋にある背鏡で自分の浴衣姿を眺めていたミキ様だったが、何か
を思い出したかのように、机の上においてあった夕焼けのような色
のリボンで髪を横で一括りにした。

そして満面の笑みで私に言った。

「よし！行こう、アスカちゃん。彼が待ちくたびれていると思うか
ら」

やはり私は、彼女に一生敵わないんだろうな、とその時心のどこか
で思った。

その感情は、心のゴミ箱に放り投げなかった。

* * * * *
* * * * *

あれ、君また来ちゃったの？全く物好きだね。そんなに俺のことを気に入ってくれたのかな？でも、俺そんなに面白い人間じゃないんだよ。期待させて、ごめんね。

……いや、今は幽霊だったね。すっかり忘れていたよ。久々に話し相手がいると、ついつい自分のことを忘れてしまうね。

次から、気をつけるよ。

さて、君に自己紹介しなきゃいけないね。何となく仲良くなれそうな相手には、自分のことを知ってもらいたいじゃない？ 生 前の名前？そんなの教えられないよ。

何でって？だってそれ《・・・》教えちゃったら面白くないじゃない。教えたいけど、ごめんね。その代わりに、今の名前を教えよう。

俺の名前は、二和^{にわ} 一郎^{いちろう}。職業は 時空間の管理人。通称、

“時の番人”だよ。以後よろしくね。

第二十八話 【能無しの鷹】と靴音

靴音が響く。規則正しい靴音だった。その規則正しさに反して彼の服装はあまりにもラフである。深緑色の学校指定のジャージのしたに白いランニングシャツ、下は灰色のダメージジーンズに上物の革靴。髪の毛は金色でワックスでツンツンに逆立たせている彼は、ある程度整った顔立ちをしていた。そんな革靴以外は不真面目そうな彼には、ある一つの『望み』がある。でもその『望み』を叶えるには、途轍もない状況が必要だった。

でも。

(……今は絶好の環境だよなあ)

そんなことを思いながら、彼は歩く。規則正しい靴音を立てて。

* * * * *
* * * * *

西暦2100年7月29日、午前9時57分。東京都某区の超高層ビル、516階『会議室』にて。

彼はその重厚な木の扉の前で軽い欠伸をしながら、ノックしようとして手を出したり引つ込めたりしていた。その理由は単純明快で、彼が極度の遅刻魔だからである。深緑のジャージに白いランニングシャツ、下はダメージジーンズに何故か上物の革靴。頭は金色のツンツン頭の青年は「……うーん、言い訳どうすっかなー」などと独

り言を呟きながら何やら困った様子であった。

その場所にたまたま一人の一般戦闘員が通りかかった。迷彩柄の軍服を模した制服に身を包んだ彼は、そのジャージ男を怪しい人物と決めつけ、ジャージ男に向かってツカツカと早足で歩み寄ると、勢いよくその肩を掴んだ！

「おい！ 貴様、何者だ！ その部屋は役員様方以外は立ち入りを禁止されているのだぞ。“タイムス”に入ったら誰もが一度は教わる基本も知らんのか！！」

肩を掴まれ強制的に後ろに振り向かされた彼は、その戦闘員の様子を見て「あっ、コイツ俺のこと知らないのねー。さて、どうしようかなー」などと考えていた。

その戦闘員のことを無視することも出来ず、曖昧に笑い顔を作った彼は、「コイツの誤解をどーやってとくかなー」と頭をフル回転して考え始めた。ちょうどその時だった。彼の後ろの重厚な木の扉が開いて、全身を黒いスーツで包んだ男が出てきた。

「そこで何をしている」

その男の顔を見た途端、その戦闘員の顔が見る見る青ざめていくのが彼には分かった。戦闘員はたった一秒足らずで頭を深々と下げると、他のフロアーに響くような声できびきびと話しはじめた。

「……申し訳ありません、時暁様ときあけさま！！ 私わたしがフロアーの巡回中、この者が怪しげな行動を取りつつ『会議室』の前をふら付いていたので、“タイムス”の規則を再度教育しようとしておりました。どうかこの私の数々の非礼をお許しただけですでしょうか！！！」

戦闘員の言い分を一通り聞いた黒いスーツの男

時暁ときあけは、自分の

自分の勘違いが分かり、ひどく狼狽している戦闘員を宥めてその場を後にさせる。その後、一部始終を見ていた時暁は言った。

「で、お前は何か俺に言わなければならないことは無いのか」

「遅刻して申し訳ありません、リーダー。あと、こんなくだらない騒動に巻き込んでしまい重ねてお詫び申し上げます。……俺は『五つの椅子』、クビ決定ですよー」

「誰がお前を首にするといった。そして、今日は遅刻ではない。お前は三番目だ」

それを聞いた瞬間、青年は喜びを隠せず「よっしゃあ！ 今日は何も回避！！」とガッツポーズを決めていた。時暁は眉間に皺を寄せ、早く入れというようなジェスチャーをして『会議室』の中へと消えた。それに続けて青年も中へ入る。

今日は“定例会議”の日であった。

第二十八話 【能無しの鷹】と靴音（後書き）

投稿がかなり遅くなり、本当に申し訳ありません（泣）

もう夏だの、鰻だの言えない季節になっていますね。今まで覗いてくださった読者様には本当に申し訳ない気持ちで一杯です。

あまり言い訳もしないことにします。詳しいことは活動報告にて書きますので、よろしければそちらを覗いてくださると嬉しいですよ。

少し個人的な話をさせていただきますと。

……まあ、去年はこの『F×R』も五十話ぐらいには進ませているだろうとか思っていたんですけど。考え方が甘かったです、本当にすみません。今年こそ五十話突破したいですね。（本当にそう思います）

まあ一月に一回のペースでは五十話突破は中々いかないので、少しづつ投稿のペースを上げられたら……、なんて思っています。

そのほかにも『小嘶』や『殺し屋』の方もあるので、ちょいちょい頑張りたいですね。

あと新連載もやりたいと思っています。三本ほど。

この新連載は『F×R』の流れを汲むものを一本、残り二本は完全新作にしようと思っています。

まあ今のままでは新連載も何もないので、とりあえずは『小嘶』を完結させることを第一に考えます。

こんな駄目駄目な自分ですが、今年も宜しくお願い申し上げます。

以上、セ、ンのおでんが神味だと思ってる条理でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0338r/>

Future x Real

2012年1月2日06時48分発行